新版・記憶の底

@kyo

記憶の底

戦後処理も大分進んだとは云え、神聖ラングラン帝国領内には、未だ国に帰れぬまま の敵機が散見されていた。捕虜になる覚悟のある者は進んで関係各所に投降し、その覚悟のないものは自力で国に帰り着く為の撤退戦に臨む。だからこそ彼らとの戦いは、マサキたち正魔装機の操者にとっては殲滅戦の側面が強いものであった。

尤も、そんな戦いも大分数を減らしたものだ。

徐々に日常へと戻って行った正魔装機の操者たち。同じく日常に戻りつつあったマサキもまた、今日は西、明日は東と、かつての平和な日々のように、あてもなく風の魔装機神を方々へと疾(はし)らせていくようになった。

そのマサキの目の前に突如として現れたゴリアテとバフォーム。シュテドニアスとの国境からは大分離れた州での魔装機神との邂逅に、シュテドニアス軍の残党と思しき彼らは逃げ切れないと悟ったようだ。だからこそ、せめて最後に神聖ラングラン帝国に一泡吹かせようと考えたのだろう。十六体の正魔装機の頂点に君臨する風の魔装

機神サイバスター、その操者であるマサキの首を狙うように彼らは一直線に進軍を始めた。

単機であれば撃破も容易なシュテドニアス製の魔装機は、編隊を組まれると途端に厄介な存在に変わる。彼らは有効射程距離を保って隊列を入れ替えることで、攻撃の手を休めずに、常に耐久性が最も高い機体をマサキの正面に立たせてきた。そうやって効率的にサイバスターの機動力を封じ込めた彼らは、細かく正面の敵を突き崩すことしか出来なくなったマサキに、ここぞとばかりに一斉射撃による集中砲火を浴びせかけてきた。

とはいえ、そこは長い戦いを終えたばかりのマサキとサイバスターだ。

極限まで改造（チューンアップ）されたサイバスターの耐久性能は、ゴリアテやバフォームの攻撃ぐらいであれば弾き飛ばせるまでに高められていたし、実戦で磨き上げられたマサキの回避性能は、彼らの集中砲火を避けきれるまでに極まっていた。

実際、彼らの砲撃はサイバスターにかすり傷ひとつ付けられなかった。

戦闘が続けば続いただけ、マサキの戦意は高まり、それに呼応するようにサイバス

ターの戦闘能力もまた高まりをみせた。攻撃力や防御力は勿論のこと、機動力に回避性能まで。戦場に立てば立った時間の分だけ、マサキの手足かと見紛う動きをみせるサイバスター。白亜の機神の大胆ながらも繊細な挙動は、シュテドニアス軍からすれば陽炎のようにも映ったことだろう。

サイバスターがふっと姿を消したが最後。次の瞬間には周辺の魔装機の装甲が吹き飛ぶ。それは徐々に、シュテドニアス軍に焦りを感じさせていったようだ。隊列が乱れる。それを見越していたに違いないマサキは、だからこそ冷静に戦局をコントロールし続けていた。

わざわざ共鳴（ポゼッション）を起こさずとも、高いパフォーマンスを発揮出来る。それはマサキとサイバスターが、長く続いた戦乱を戦い抜く為に身に付けた技術のひとつだった。

そうでなくとも高い基本性能。その圧倒的な力の前では、ゴリアテだろうがバフォームだろうが赤子のようなもの。焦ることなくヒットアンドウェイを続けたマサキの戦略的な動きもあってか、半刻も経つ頃には、シュテドニアス軍勢は残すところ一機というところにまで追い込まれてしまっていた。

「後はお前だけだ。素直に投降すれば国に返してやる」
残されたバフォームに、マサキは投降を呼びかけた。
無駄な戦いを長く続けることがなくなったのも、マサキの成長のひとつだった。地底と地上のふたつの世界を行き来し、それぞれの世界で戦いに明け暮れた過去。敵方の戦力を見極められるようになったマサキは、どこで彼らに情けをかければいいかを心得るようになっていた。
けれども、今回に至ってはその心掛けが裏目に出た。
「シュテドニアス、万歳！」
マサキの呼び声に即座に反応したバフォームは、直後、至近距離までサイバスターとの距離を詰めてきたかと思うと、マサキに反応させる隙を与えずに自爆した。

※　※　※

どうせ呆気なく決着が着くと思っていながらも、シュウはその戦闘から目を離せず

にいた。
　よもやラングラン王都から遠く離れた場所で、マサキとシュテドニアス軍の残党との戦闘を目にすることになろうとは。思いがけない機会にグランゾンの足を止めてしまったシュウだったが、数を揃えようとも相所は詮量産型魔装機。風の魔装機神として十六体の正魔装機の頂点に君臨するサイバスターには敵うべくもないようだ。
　機動力と回避性能に勝るサイバスターは単機の方が戦いに向いているのではなかろうか。そう思わせるまで鮮やかな立ち回り。力の差が歴然としている戦闘の経過に、立ち去るべきか否か。シュウは悩みながらも、十数キロ離れた地点で彼らの戦闘を見守り続けた。
「しっかしまあ、あの人相変わらず戦闘能力は高いんですね。もう無双状態じゃないですか」
　いついかなる時でもお喋りな使い魔（チカ）は、マサキとサイバスターの戦いぶりをそう評した。
　砲撃を悉く弾いてみせる装甲に、集中砲火を鮮やかに避けきってみせる回避力。そ

れはサイバスターとマサキの能力が噛み合っているからこそ為せる業だ。
勿論、防御に優れているだけではなく、攻撃にも優れている。ディスカッターの一太刀は呆気なくゴリアテとバフォームの装甲を剥いだものだったし、サイフラッシュに至っては陣形を崩すほどのダメージを与えている。とはいえ万が一ということもある。マサキに恩義を感じているシュウは、サイバスターの力を信じながらも、不測の事態に備えてその場に留まることにした。
過酷な環境を魔装機に強いる戦場では、どういったトラブルも起こり得る。電気系統の故障、武器の不発。動力炉がバックファイヤーを起こすこともあれば、マサキのように莫大なプラーナが計器類を使い物にならなくしてしまうこともあった。ましてや多勢に無勢とあっては。どれだけマサキが戦局のコントロールに長けていようとも、人間のすることに完璧などというものはない。些細なミスに足元を掬われるというのは、戦場ではよく聞く話だ。
だからこそ、シュウは辛抱強く自分の出番を待ち続けた。自尊心（プライド）の高いマサキは決していい顔をしないだろうが、それでも返したい借りがある。サーヴァ＝ヴォルクル

ス。邪神に精神を飲み込まれたシュウを二度も救ってくれた少年は、それを恩に着せることがなかったからこそ。

――自分を昏い世界から引き戻すことの出来る少年。マサキのような存在は他にいない。

たかだかひとつの戦場で窮地を救ったぐらいで返しきれる恩ではなかったが、塵も積もれば山となる。シュウは自身の気が済むまで、マサキに受けた恩を返し続けようと覚悟を決めていた。

「でも、ご主人様。そのお気持ちは結構なことですが、恩義を返す機会は今ではないようですよ」

そういったシュウの考えを見通しているらしい。チカがそう云って退屈そうに欠伸を洩らす。

多勢に無勢ではあったものの、サイバスターの有利は覆りそうになかった。シュテドニアス軍の戦力を着実に削いでいくサイバスターとマサキ。その戦いぶりは、流石は魔装機神と感服したくなるまでに堂に入っている。

噴き上がる火炎と粉塵の中、無傷で大地に立ち続ける白亜の機神（サイバスター）にシュウはほうと溜息を吐いた。

地上を疾（はし）る雄々しき大鳳の華麗なる動きは、重戦士系統の機体であるグランゾンには出来ないものだ。隼（はやぶさ）のように宙を舞い、鷹のように獲物に襲いかかる。今となっては、シュウはその操者になろうなどといった烏滸がましい考えを持つことはなかったが、それでもその美しいフォルムと動きには目を奪われずにいられなかった。

サイバスターとマサキのポテンシャルの高さは、これまでの戦果でも知れたものだ。十六体の正魔装機の中でも、撃墜数はトップクラス。戦局をたった一機で引っ繰り返してみせたことも数知れない。単機での戦いにも充分耐え得る性能を有するサイバスターは、驚異的な反応速度を誇る操者を得たことで能力を十全に発揮出来るようになった。

その圧倒的な力は、戦乱が収まろうとも健在だ。

桁違いの反応速度で立て続けに攻撃を繰り出していっては、一機、また一機と、シュテドニアス機を沈めてゆくサイバスターとマサキ。シュテドニアス軍の数の多さに時

間がかかってはいるものの、無傷で最後の一機まで辿り着いたのは、流石と称賛する他ない。

だが、次の瞬間だった。

何が起こったのか。巨大な爆発音と爆炎が起こったかと思うと、サイバスターが機体を大きく傾(かし)がせた。

シュウは状況を把握する為に、スコープを拡大化した。どうやら最後に残ったシュテドニアス機が自爆をしたようだ。モニターに大写しになるサイバスターの装甲が、広範囲に渡って煤けてしまっている。幸い、尾部が上手い具合に三本目の脚として機能したようだ。確りと支えられた躯体。サイバスターの上体は後傾していたが、今直ぐ均衡(バランス)を崩して倒れるといったことはなさそうだ。これならば、そう時間もかからずに元の姿勢に戻せるだろう。そう状況を見立てたシュウは、だからこそ、マサキがサイバスターのコントロールを再開するのを待った。

だがしかし、いつまで経ってもその機体が動き出す様子がない。

シュウは更にスコープを拡大化した。そして気付いた。仰け反っているように映っ

ていた頭部が、実際には躯体から浮いてしまっているということに。
爆発の衝撃で操縦席のカバーが開いてしまったのだ。シュウは目を凝らした。剥き出しになっているコクピットの中の状況は、この距離からでは明瞭（はっきり）とは窺うことが出来ない。
「ご主人様、あれヤバくないですか？」チカの言葉にシュウは頷いた。
何が起こっているのかわからないが、放置していい状態ではなさそうだ。シュウは急ぎグランゾンをサイバスターの元へと向かわせた。
「いっそげ、いっそげ。いーそーげー……」
グランゾンをサイバスターに隣接させたシュウは、歌うように言葉を吐いているチカをポケットに押し込んだ。
浮いた頭部カバーの隙間は思ったよりも狭く、彼を肩に乗せたまま潜り込むのは難しいように感じられる。シュウは身を屈めて隙間を潜り抜けた。薄暗い空間。どうやら電気系統に異常が起こったのだろう。光の消えたモニターの下で、計器類が激しく警告音（アラート）を発している。シュウは辺りを窺った。

中央に据えられている操縦席から、ジーンズを履いた脚が伸びている。マサキだ。シュウは回り込んで彼の容態を確認した。だが、操縦席に身体を沈み込ませているマサキは、気を失っているのか。ぐったりとしたまま目を開くことがなく。

マサキ。シュウは耳元でその名を呼んでみた。それでもぴくりとも動くことのないマサキに頬を叩く。うん……と、その口元から小さな声が洩れた。マサキ。シュウは重ねてその名を呼んだ。刹那、ゆっくりと開かれたマサキの瞳が、ぼんやりとシュウを捉えた。

「あんた、誰だ……？　それに、ここは……？」

思いがけない台詞に、シュウは僅かに刮目した。

操縦席が剥き出しになるほどの衝撃を受けたのだ。ただでは済まないとは思えど、幾度もの大戦を戦い抜いてきた少年なのだ。そのマサキが、たかだか自爆に巻き込まれたぐらいで記憶を失うなど。

状況を把握出来ずに辺りを見回しているマサキ。シュウは彼の姿を信じ難い気持ちで見詰めていた。

「猫……？　あんたのペットか？」

少し離れた床の上に転がっている使い魔を見付けたマサキがそう口にする。

シュウははっとなった。今は彼らの救助活動が先だ。

システムや電気系統に異常が起こってしまっている以上、サイバスターに自力で姿勢を直させるのは難しい。このままではサイバスターが地に伏しかねない。シュウは二匹の使い魔の許に向かった。白亜の大鳳が決定的に均衡（バランス）崩す前に、彼らをここから救出しなければ。

シロ、クロ。シュウは二匹の使い魔の名前を呼びながら、その身体を揺すった。やはりと云うべきか、どちらも反応しない。何処かに頭を打ち付けでもしたのだろうか。使い魔の意識がなくなるという異常事態。胸騒ぎを覚えながら、シュウは彼らから手を離した。

――しかし、長く戦禍をともにした筈の使い魔二匹を目の当たりにしてこの反応とは。

次いでシュウはマサキを振り返った。どことなく生彩を欠いた彼の目が、シュウの

一挙手一投足に視線を注いでいる。
「自分の名前はわかりますか？」
「当たり前だろ。そのくらい――」
シュウの問いに勢い込んで口を開いたマサキが、そこでふと困惑した表情になった。云えると思ったものが出てこないのだろう。自身も記憶を失ったことがあるシュウは、直ぐに彼が置かれている状況に見当が付いた。
「俺は、誰だ……？」
どうしたらいいかわからないといった様子のマサキの後ろ髪が血に濡れている。恐らく頭を打ったのだ。彼が一時的な健忘状態に陥っていると判断したシュウは、「大丈夫ですよ、ほら」その手を取り上げて、マサキを操縦席から立ち上がらせた。
手を引きながら、コクピットを出る。何もわからない状態であるからだろう。すんなりと後に続いたマサキが、サイバスターの外装を伝い歩きながらふと眼下に視線を向けた。
「……何だ、これは……」

シュウはマサキの手を強く握った。
今さっきマサキが戦っていた戦いの跡。平原に点在する魔装機の残骸は、大半が原形を留めていなかった。
折れた腕部や脚部に、剥き出しとなった骨組（フレーム）。犠牲となったシュテドニアス兵士の躯が目に入るようなことはなかったものの、今のマサキにとっては刺激の強い光景であるに違いない。
「危ないですから、あまり下を見ないように」
「だけど、あれは……」
「大丈夫ですよ。動くようなことはありません」
シュウは先を急ぐことにした。曲面の多いサイバスターのパーツを慎重に伝い歩き、肩パーツからグランゾンの腕パーツへと飛び移る。ここからは足元に不安を覚えることはない。シュウはマサキを連れて真っ直ぐに頭部コクピットへと向かった。
「そこで少し待っていてください」
物珍しそうにコクピット内を眺めているマサキに待つように伝え、再びサイバスター

の操縦席へと。シロとクロは相変わらずに微動だにせず床の上で伸びている。シュウは二匹の使い魔を回収した。そして、未だ不調を訴え続けているサイバスターを尻目にグランゾンのコクピットへと戻った。

流石にこの状況では、サイバスター本体はどうにもしてやれない。

王都に近い場所であれば、グランゾンで牽引して連れ戻ることも出来たが、ここはバルディア州だ。王都に向かうには、バランタイン、ブルクセン、パオダのいずれかの州のふたつを経由しなければならない。グランゾンでサイバスターを牽引しているところなど、長く衆目に晒していい筈がないだろう。ましてや未だ情勢が不安定な中とあっては。

シュウは自分が広域指名手配犯であることに自覚があるのだ。

幸い非常用の救難信号発生システムは生きているようだった。それならばじきに王立軍が回収に来るだろう。シュウは蓋然性に賭けることにした。自身の手でサイバスターを直したい気持ちもあったが、機材もなければ設備もないここでは無理なこと。

迷いを捨てて、グランゾンを発進させる。

目指すはここより南、ヌエット海の洋上に浮かぶ小さな島。そこにはシュウが身を隠すのに使っている仮住まいのひとつがあった。シュウは南に向かってグランゾンをひた走らせた――……。

※　※　※

仮住まいに戻ったシュウはマサキをリビングに残して、先ずは意識を失っている二匹の使い魔の容態を確認することにした。

さしたる設備もない仮住まいでは、出来ることには限りがある。

シュウは彼らの脈と脳波を測った。いずれも正常値を刻んでいる。続いて検温。これも正常の範囲内だ。魔力量にも問題なし。目立った外傷もない。使い魔として機能するには問題のない状態。それが確認出来た以上、シュウにしてやれることは何もない。生身の肉体を持つ生物とは根本的に在り方が違う彼らは、恐らく主人の異常にも反応してしまうのだろう。そう考えたシュウは、二匹の使い魔をリビングの一角に寝

かせて様子を見ることにした。

シュウが彼の使い魔の状態を確認している間、マサキは所在無げにソファに座っているだけだった。記憶がないというのは本当であるのだろう。彼にとって大事なパートナーであった二匹の使い魔は、今となっては見知らぬ二匹の猫でしかないのだ。

「あなたの具合も見なければなりませんね」

シュウはマサキの隣に腰を下ろした。そして、強い衝撃を受けた思われる彼の後頭部。首を覆い隠している後ろ髪を掻き上げた。

うなじより上。つむじとの間に、こぶし大の皮下出血が出来ている。

病院に連れてゆくべきか、それとも。シュウは逡巡した。サイバスターの操者であるマサキの顔と名前はラングラン全域に知れ渡ってしまっている。そうである以上、何処に運び込んだとしても結果は同じ。彼らはマサキの『現状』を情報局に報せるだろう。

ただの怪我であるのであればまだしも、記憶喪失である。隠匿の術を使って身分を詐称してマサキに同行したところで、シュウがグランゾンで現場に留まっていた事実

は書き変わらないのだ。事態が情報局に伝わったが最後。勝ち気で豪胆で胆力のある従妹は全力で目撃情報を探すことだろう。

痛くもない腹を探られることほど厄介なこともない。

あちら側に余計な詮索をされたくないシュウは、だからこそ、自分の力で現状を打破するしかないと覚悟を決めた。

サイバスターを現場に放置してしまっている以上、事態が発覚するのは時間の問題ではあったが、猶予があれは対処のしようもある。シュウは一度リビングから出て書斎に向かった。情報局と軍部の電網（ネットワーク）に忍ばせておいた情報収集用のＢＯＴを起動する。サフィーネたちの力を借りられれば更に精度の高い情報が得られるが、状況が状況だ。マサキに余計な混乱を与えるのは避けたい。

「チカ、暫くこちらで待機を」

「わかりました。目ぼしい情報が集まったら呼びに上がります」

ポケットから飛び出したチカが、ＢＯＴが収集したデータが流れるホログラフィックディスプレイの前に陣取る。

「変な気は起こさないでくださいね、ご主人様！」

釘を刺すチカの言葉を背中に受けながら、シュウは書斎を出た。

リビングに戻り、二匹の使い魔同様にマサキの脈と脳波を測定する。右も左もわからない状態のマサキの不安は計り知れなかったが、自分がシュウに助けられた自覚はあるようだ。普段と比べればしおらしい態度。シュウの言葉に従って素直に検査を受けたマサキは、その結果に問題がないとわかると少しだけ安心した表情を見せた。

検査が終われば次は処置だ。脳の異変は急激に現れる。今日明日は容態の急変に気を付けなければならないが、大きさに反して、瘤（こぶ）の膨らみ自体はそこまでもない。打ち付けた際に切ったらしい傷口からも既に出血は止まっているようだ。

これなら簡易的な処置でも問題はないだろう。

傷を消毒し、ガーゼを当て、ネットを被せる。包帯を使うのは止めた。ガーゼがずれ易いのが難点だが、これなら食事にも不自由しない筈だ。シュウはマサキを引き連れて機材のある地下室を出た。

何を話せばいいかわからない様子のマサキだったが、リビングのソファに再び身体

を収める頃には気持ちも落ち着いたようだ。「迷惑をかけるな」ぽつりと呟く。
「気にせずとも結構ですよ。困った時はお互い様です。いずれあなたの記憶が戻った際にでも、この借りは返してもらうことにしましょう」
シュウの冗談はマサキには通じなかった。ああ。と短く頷き返してくる。
「ところで、あなたの記憶が失われている件についてですが……」
シュウはマサキに正直に自分の考えを告げた。戦闘時のダメージの衝撃による一時的な健忘だと考えられること。そうである以上、数日もすれば記憶が戻ると考えられること。それまでは、下手に動き回らずここに居た方がいいと考えられること。
黙ってシュウの説明を聞いていたマサキがややあって口を開く。
「俺は何者なんだ？」
シュウは言葉に詰まった。何者と問うているぐらいだ。通り一遍の答えを期待しているのではないのだろう。
それが証拠に、マサキはシュウの答えがないと見るや否や、立て続けに言葉を継いできた。

「あの白い巨大な人型汎用機（ロボット）は何だ？　どうして俺はあそこに居たんだ？　俺には何もわからない。けれども俺の後頭部に瘤（こぶ）が出来たのは、あの人型汎用機（ロボット）に乗っていたからなんだろ？　なあ、あんた。教えてくれよ、俺は何者なんだ」

今のマサキは、地上人のありきたりな常識の世界で生きているのだ。

マサキの言葉でそれを覚ったシュウは、彼にどう答えるのが適切であるかを考えた。魔装機神サイバスターの操者である地上人。シュウの立場からすればこれだけで済む答えは、けれどもマサキからすれば膨大な説明を要する答えになってしまう。

何故、サイバスターに乗ることになったのか……何故、地底世界に召喚されたのか……そもそも魔装機神とは何か……シュウにとって、それらを細かく説明することは造作ないことではあったが、相手は記憶を失くしたばかり。

一度に大量の情報を与えられても、混乱するだけだ。

どの道、記憶が戻れば自明のものとなる情報である。説明に時間を費やしてマサキに負担を強いるよりも、彼が納得出来る最小限の情報を与えるだけにしておいた方が、混乱や負担も少なく済むだろう――マサキに与える情報を絞ることにしたシュウは、

なるべく簡潔に、そして端的に、彼の疑問に答えることにした。
名前がマサキ＝アンドーであること。白い巨大な人型汎用機（ロボット）が戦闘に用いられているものであること。機体の名前がサイバスターであること。
「俺の名前はマサキって云うのか」考え込む様子を見せたマサキが呟く。「聞き覚えがある」
「あなたの名前ですからね」
シュウはマサキの隣に腰を下ろしてその顔を覗き込んだ。
名前を知っただけではあったが、それがアイデンティティの獲得に繋がったようだ。途端に覇気が漲（みなぎ）る顔。筆で引いたような眉の下で、光を取り戻した瞳が輝き始める。そういった表情こそがマサキには相応しい。
この調子なら記憶が戻るのも早いかも知れない。
シュウは思った。思って、そして考えた。
いずれは記憶が取り戻される日が来る。その日を迎えたマサキはシュウに助けられたことをどう思うのだろう。余計なことをするなと怒るだろうか？　それとも、らし

くなく感謝の言葉を述べてみせるだろうか？　それとも……その結果を知ることが、シュウには少しだけ怖く感じられた。

「その様子なら、記憶が戻るのも早いことでしょう」

自らのそういった感情を押し殺すべく、シュウはマサキの頬に手を這わせた。

血の通った肌の温もりが手のひらを通じてシュウに伝わってくる。温かい。冷えたシュウの肌とは異なる生気に満ちたマサキの身体は、どうしようもなく心地良い。だのに、妬ましく感じられる。

そう、何もかもが妬ましい。

いつもならば触れることすら難しい肌に、今の自分は容易く触れられている。その事実がシュウの胸をさんざめかせた。

まるで雛鳥が初めて目にしたものを親だと認識するように、シュウを信頼しているマサキ。シュウは目を瞬かせた。顔を合わせれば憎まれ口ばかり叩いてくるあのマサキが、記憶がないからとはいえシュウを近くに置いている。この現実を過去の自分が知ったらどう感じることか。きっと盛大にせせら笑うに違いない。

借りは返さなければならない。

けれども容易く自分に気を許されるのは赦せない。

撚(よ)れた糸のように絡まってしまった自らの心。嫌気に侮蔑、恋慕に親愛。様々な感情が入り乱れる胸の内を、シュウは自分のことながら持て余してしまっていた。

伝説の剣聖の名を持つ戦士として、十六体の正魔装機の頂点に君臨するリーダとして、比類なき気と能力を有する地上人として、マサキには風の魔装機神(サイバスター)に相応しい操(プラーナ)者であって欲しい。シュウはかつての自分の立場から、そう願わずにはいられなかった。

けれども、年長者として、そして地上人の血を有する者として、こうも願ってしまうのだ。世に擦れず、いつまでも無邪気で真っ直ぐな少年のままであって欲しい――。

マサキのことを考えると、シュウの心は千々に乱れた。暴虐な嵐に見舞われたかのように、衝動的な行動に手を付けたくなる。それはシュウが好ましい感情ばかりをマサキに向けてはいなからでもあった。

昏く、澱んだ情念。

マサキが欲しい。それが純粋な敬愛の念であるのか、それとも単純な支配欲であるのか。そんな単純な自身の感情ですらシュウには最早わからなくなってしまっていた。

それでも、たったひとつ。永久に変わることのない事実がある。

破壊神サーヴァ＝ヴォルクルスに精神を囚われているシュウの自我を、二度にも渡って取り戻してみせた少年。彼は他の誰にも成し得なかったことを易々と成し遂げてみせた。

道を違えたシュウを、ただひたすらに追ってきた少年。地上と地底の二つの世界で、シュウの在り方を見守り続けた少年。そしてシュウの一度目の命に引導を渡した少年。シュウの故郷であるラングランの地を守り、シュウを正しい道へと引き戻した少年は、それがどれだけの偉業であるか気付いていないようだったが、シュウはとうに気付いてしまっていた。

彼は後世に名を残す英雄になる。

だからこそシュウは思う。きっと、自分がマサキに抱えている感情は、愛や憎しみといった単純なものではないのだろうと――……。

「……まえ」不意に聞こえたマサキの声がシュウを現実に引き戻す。「名前、教えてくれよ。あんたの名前」

頬に当てられたままのシュウの手を払うこともなく名を尋ねてくるマサキに、きっと容態を見ているだけだと思っているのだ。そうおもいつつも、胸騒ぎは限りなく。

「シュウ――ですよ、マサキ。そう呼んでくだされば結構」

ラストネームをシュウが教えなかったのは、マサキに苗字で呼ばれるなどといった余所余所しい態度を取られるのが耐えられなかったからだった。

彼にはいつでも太々しい人間であって欲しい。

そうしたシュウの願いが届いたのかは不明だが、マサキが苗字を尋ねてくることはなく。わかったと頷くと、シュウ、とシュウの名を口の中で呟いてみせる。

「知ってる気がする」

少しばかり考え込む様子をみせたマサキが、シュウの手を取った。

「何だろう、胸が騒ぐんだ。あの白い人型汎用機（ロボット）の名前とか、あんたの名前とか……自分の名前とは違う。変な風に胸がざわつくんだ。締め付けられて苦しいような……」

シュウの名前を自分の愛機の名前と同様に懐かしいものとして受け止めているマサキに、瞬間、シュウの胸は激しく沸き立たった。

それはとてつもなく甘美で、そしてとてつもなく悪魔的な誘惑だった。

頬に添えたままの手が脈打つ。離さなければならないのはわかっていても離し難い想い。シュウはマサキの両頬を自らの両手で包み込んだ。そして、自らを浸食する艶やかな情動に突き動かされるがまま、悩まし気な表情でいるマサキの顔を仰がせた。

「マサキ、あなたは」

疑うことを知らぬ瞳が真っ直ぐにシュウを凝視(みつ)めてくる。無垢なまでの純真さ。記憶のあるマサキはシュウに対して蓮っ葉な表情を向けがちだった。けれども、本来の彼はこうした表情を晒すことを臆さない無邪気な人間でもあるのだ。

「私を信用しているのですか」

こくりと頷いたマサキに、僅かにシュウの胸に躊躇いが生まれる。けれどもそれで抑え込める理性ではなかった。

顔を重ねて、口唇に。そっと、自らの口唇を重ねる。

頑健な精神とは裏腹な柔い口唇。触れ合った先から溶けて出してしまいそうなぐらいに甘い。そのマサキの口唇をシュウは何度も自らの口唇で食(は)んだ。微かに開かれた口唇に、舌を差し入れたい衝動に駆られたものの、相手は記憶を失っているとはいえ、あのマサキ＝アンドーである。如何にシュウが厚顔不遜な性格であっても、そこまでは傲慢になれない。

以前だったら口汚く罵ってみせたマサキの言葉は、今日はなかった。

途惑いが露わとなった表情。瞳を見開いたまま微動だにせずシュウの口付けを受けているマサキに、名残惜しさを感じながらもいつまでも続ける訳にもいかない。シュウは触れたときと同じさりげなさで口唇を離した。

直後、「どういうことだよ、あんた……」口を拭いながらマサキが非難の言葉を吐く。

「思い出すかとも思ったのですけどね」

「それって……」

「思い出せない？」

不貞腐れているようにも映る横顔が、口の中に溜まった唾液を飲み込んだ。認めたいけれども、認められない。葛藤を感じさせる沈黙を続けるマサキが、ややあってシュウの顔を仰ぐ。寄る辺ない瞳。それはいつか何処かで見た彼の何気ない表情に良く似ていた。

――知っている、気がする……。

小さく呟いたマサキに、もうどうしようもない。シュウは自分より小柄で華奢なその身体を、ただただ力一杯抱き締めていた。

※　※　※

随分と前のことだ。

詳しい日付を手帳に残してあるその日、シュウは新しく仲間となったサフィーネたちを引き連れて、遊撃部隊ロンドベルへの接触を図った。目的は部隊への参与。彼らはシュウの目算よりもかなり早いスピードで激戦区を制しながら進攻を続けていた。

このままでは彼らの方が、先に決戦の舞台に辿り着いてしまう。

自身を狭い世界に縛り付ける枷を取り払う為なら、過去の遺恨などどれほどのものか。シュウは自らの目的の為に鉄皮面となった。テイニクェット＝ゼゼーナン。グランゾンを撒き餌として世界に混沌を呼び込んだ卑怯者をただで逃すつもりはなかった。

受けた屈辱は倍以上にして返すのがシュウの流儀だ。自身が手掛けた最高傑作にくだらない仕掛けを施されて、どうして黙っていられたものか。シュウは自らの愚かさを悔い、だからこそゼゼーナンを自らの手で断罪することを決意した。

かつて手酷い裏切りをみせたシュウの参戦に、ロンドベルの部隊内では賛否両論あったようだが、来たる決戦に向けて数多くの戦力を必要としていたこともあってか。思ったよりもあっさりとロンドベルの旗艦への着艦を許されたシュウは、初めての大部隊に興奮しきりで付いて回ってくるサフィーネたちをどう処せばいいかわからずに、自身の身を休める場所を探して艦内をひたすらに歩き回っていた。

――シュウ様、どちらに参られましたの。シュウ様……

仲間としては非常に頼りになるサフィーネたちは、けれども時として、シュウの傍

に居ることを許されているという慢心からか。必要以上にシュウの私事（プライベート）に干渉してくる。

この時もそうだった。やれ、今日の食事は何にするのか。やれ、これから何をするのか。やれ、手伝えることはないか……それが煩わしくて堪らなかった当時のシュウは、ひとりになれる時間を見計らっては、なるべく彼らと顔を合わさずに済む場所を探して右へ左へ――……。

そして、その場所へと足を踏み入れてしまったのだ。

少しでも人気のない場所へと足を進めている内に、辿り着いてしまった居住フロア。そこにマサキの私室（キャビン）があった。

――おかしいわね。この辺りで見かけたような気がするのだけど……

――あちらに行ってみませんこと、サフィーネ。

シュウは逡巡した。背後から迫りくるサフィーネとモニカに、猶予はそうもなく。かといって、早急に身を隠せる場所もない。シュウはマサキのキャビンの前に立った。電子鍵が施錠されていないことを確認して扉に手をかける。

彼はどういった時間をこの狭い部屋で過ごしているのだろう。
マサキに並々ならぬ関心を寄せているシュウからすれば、それは無粋な好奇心の表れでもあった。
鍵を開けっぱなしにしているぐらいであるのだ。きっとマサキは不在であるのだろう。ならば、ついでに部屋の中を観察したとしても、少しぐらいであれば、不法侵入を覚られることもあるまい。
迷いを捨てたシュウはマサキのキャビンに足を踏み入れた。
自慰に耽っているマサキの姿が目に飛び込んできたのは、次の瞬間。薄明るい室内の端にあるベッド。その上に身体を横たえていた彼は、声を殺す為だろう。シャツの裾を口に噛んで、開いた脚の中央で屹立する男性器に手を這わせていた。
「無礼は詫びますよ、マサキ。少しの間、私をここに匿ってはくれませんか」
かち合った視線に、マサキが目を瞠る。
「冗談じゃねえ。なんで俺がてめぇを匿わないと」
室内への思いがけない闖入者に、マサキが慌てているのが窺える。とっちらかりな

がらも衣服の乱れを直したマサキが、ベッドの上で胡坐を掻く。その時のマサキの不貞腐れた表情！　誰にだって見られたくない姿を、恐らくは世界で一番見られなくない相手に見られてしまったのだ。それは不貞腐れもする。

そういった表情ですらシュウの劣情を煽ると知っていてやっているのか。堪えきれない欲望が、胸の内。鎌首をもたげてくるのをシュウは抑えきれそうになかった。

しなやかな肢体を惜しげもなく晒して、己の欲望に忠実に自慰に耽るマサキの姿は、シュウの目にはそれだけ官能的に映った。

薄く開いた瞳に、切なげに歪む眉……見てはならないマサキの表情を見てしまったシュウは、けれども気まずさやいたたまれなさを感じるよりも先に、己の内に眠っている残虐な嗜虐心をそそられてしまっていた。どうしようもないほど喘がせたい。マサキに執着しているシュウにとって、無防備な彼の姿はそれだけ蠱惑的なものだ。

自然と嗤いが洩れる。こんな好機は二度とない。

藪睨みで自分と向き合っているマサキにシュウは近付いた。

「静かに、マサキ」

シュウはマサキの口を片手で覆った。いつの間にか、サフィーネの気配がそこまで迫ってきている。モニカの声や気配がしてこない辺り、彼女と別れてシュウを探すことにしたのだろう。単体で響いてくるハイヒールの音。この急場を凌がないことには、シュウの明らかとなった欲望は果たせそうにはなかった。

「私はいないと云ってください」

女の勘も侮れないものだ。部屋の前で止まった足音に、シュウは急ぎ扉の影に滑り込んだ。次いで激しく扉が叩かれる。シュウの人間関係に巻き込まれた形となったマサキだったが、事ここに至っては黙って遣り過ごせないと覚ったようだ。不承不承といった面持ちでベッドから腰を上げる。

「誰だ」

「いいから開けなさいよ、ボーヤ」

自慰を途中で中断させられたからか。気が立っているのが窺える。

「シュウ様の姿を見掛けなかった？」

「何で部屋の中にいる俺があいつの姿を見られると思うんだよ」

怒りを露わにするかと思いきや、見かけよりは冷静でいるようだ。サフィーネの突飛な行動や発言にも瞬時に反応してみせるマサキに、どうやらこのまま無事に済みそうだとシュウは胸を撫で下ろした。

正直な所、サフィーネが引き下がる確率は五分五分だと思っていた。

伊達にあの浮ついたようにも見える態度で長年ヴォルクルス教団に在籍出来ていた訳ではない。彼女はしたたかで、頭の回転が速く、機転に富み、些細な変化を見逃さない目聡さを有している。直情的で直感的、論理の構成能力に難のあるマサキでは、少々荷が勝る相手だろう。

「でも、まあ、ここには本当にいないみたいね。わかったわ。有難う、ボーヤ……」

決して嘘が上手くはないマサキが腹芸をこなしきったのを見て、シュウは素直に感心した。

有事は時と場所を選ばない。即時に出撃を求められる艦内生活では、メンタルの柔軟性が求められる。精神が頑健（タフ）でなければ務まらない立場。そういった意味で、マサキは着実に戦士として成長を重ねているようだ。

「行ったぜ」
「有難うございます。あなたには何かお礼をしなければなりませんね」
もう彼女が履くハイヒールの音は聞こえない。ひやりとする場面もあったものの、マサキは見事に彼女をあしらいきったようだ。これで彼女がこの場に戻って来ることは暫くないだろう。束の間の平穏を得たシュウはマサキににじり寄った。
「途中だったのでしょう、マサキ」
障害が取り除かれた以上、シュウが遠慮をする必要はどこにもなかった。
「巫山戯……っ……」
シュウはその欲望に忠実なるがままにマサキを弄(もてあそ)んだ。
指を肌に這わせ、口唇を貪り、青く滾(たぎ)った男性器を扱(しご)く。もっと暴虐に暴れるかと思われたマサキの抵抗は、意外にも直ぐに止んだ。続けて、耳を食み、乳首を啄み、臍を啄む。ぴくりと跳ねたマサキの身体が、しおらしいまでに大人しくなる。そろりとシュウの背中に回された手。先刻まで自慰に耽っていた彼もまた、燻ぶった情欲をその身に抱えていたのだ。

あなたと私の秘密だ。そうシュウが囁きかければ、躊躇いがちに身体を開く。途惑いながらも愛撫に身を任せるようになったマサキの身体を、シュウはその甘やかな表情とともに思う存分味わった。

時に思い出したように抵抗を試みることもあったが、それも一瞬のこと。体格差など引っ繰り返せるほどの力の持ち主でありながら、押さえ込まれればそれまでとばかりに、マサキは次第に全てをシュウに委ねていくようになった。

欲と理性の狭間で足掻く彼の葛藤がありありと窺えるマサキの態度の数々。

それがシュウには可愛らしく感じられて堪らない。

シュウはマサキの肢体を思うがままに嬲った。想像していたよりも薄い胸、想像していたよりも滑らかな腰のライン、想像していたよりも細い手首。まるで誂えたような身体の造りに、まるで自分の愛撫を待ち望んでいるようにも映る。

そうシュウを妄信させるほどに、マサキはシュウの愛撫に素直に反応してみせた。

――ああ、ああ……シュウ……

指で、舌で、どれだけマサキの身体を堪能しただろう？　喘ぎ声の合間にシュウの

名を混ぜるようになったマサキに、シュウは最後の仕上げと顔を上げた。口付けを与えながら、はちきれんばかりに膨らんだ彼の男性器を手に収める。

陰茎を扱き、陰嚢を揉み、尿道口の凹みに指の腹を捻じ込んで擦ってやる。もう達したくて堪らないのだろう。腰をしきりと振るようになったマサキの身体をシュウは力一杯抱き締めた。そして今一度、口唇を重ねて、その熱い舌を攫う。

深く口唇を合わせたその果てに、マサキの臨界点はあったのだろう。声にならない声を上げてシュウの手のひらに自らの精を放ったマサキは、暫くの間、快感の余韻に浸るかのようにシュウにしがみ付いたままでいた。

「必要になったら言いなさい。いくらでもしてあげますよ、マサキ。いくらでもね」

そう囁きかけて、後にしたマサキの私室（キャビン）。思ったよりも物の少なかった部屋を思い返しながら、シュウもまた、暫くの間、続けて身を潜めた非常階段でその余韻に浸ったものだ。

しかし、元来が自尊心（プライド）の塊のような少年だ。かつての敵、シュウの愛撫に屈してしまったことは、彼にとっては望外の出来事だったに違いない。それはマサキの心にし

こりとなって残ったのだろう。だからこそ、マサキが自らシュウに行為を強請(ねだ)ってくることはなく。

頑固で意固地な面を併せ持つ彼は、容易にはシュウに心を開きはしないのだ。

けれども、消すに消せないあの表情。半開きになった口唇に、うっとりと細められた瞳……時間をかけてマサキを篭絡しようと考えていたシュウは、彼の自慰を目撃してしまった瞬間に湧き上がった欲望を、それからかなりの時間が経っても鎮めきれずにいた。

彼を喘がせたい。人目に触れぬその表情をもう一度見たい。

この戦いが終われば、シュウとマサキの物理的な距離はまた離れてしまうだろう。交わることのない未来。それぞれが別の道の上に立っているからこその別離(わか)れ。自らの進むべき道を違えるつもりのないシュウは、だからこそ欲を募らせていった。

日が経つのはあっという間だ。そろそろロンドベルからの去り際が近くなったのを肌で感じたその日。この機会を逃せば二度はないと、発作的な衝動に駆られたシュウは、その勢いに任せてマサキの私室(キャビン)を訪ねた。

「何だよ。てめえに用はねえぞ」
「私にはあるのですよ、マサキ」
一度覚えてしまった蜜の味は、そう簡単には忘れ切れないものだ。何の用だよ。と、云いながらシュウを自室に招き入れたマサキが、まるで誘いかけるかのようにベッドに腰を下ろす。
警戒心が微塵も感じられない。
不在の二匹の使い魔について尋ねれば、格納庫でサイバスターの最終調整中とのこと。最終戦も間近とあっては、さしもの彼らも呑気に身体を休めてはいられないようだ。今日は戻らねえんじゃないか。ぶっきらぼうに云い放ったマサキに、シュウは自分を取り繕うのを止めた。
「そろそろ慰めが必要だと思って来たのですがね」
「巫山戯ろ。誰がてめえなんかと……」
シュウに与えられた快感を、マサキは覚えているのだ。
それが証拠に、声を荒げることをしない。それだけではない。シュウを力任せに追

い出そうともしない。
「用はそれだけか。だったら帰れよ……」
口先ばかりの拒否の言葉。その終わり際の消え入りそうな小ささに、シュウはクックと嗤った。
「いつもならもっと派手に噛み付いてみせるでしょうに。あなたらしくありませんね、マサキ」
そう云って、シュウはマサキの肩に手を置いた。
ぴくりと震える身体。口唇を硬く結んだマサキが、気まずそうにシュウから視線を逸らす。
そう、そうでなければ。シュウは高らかに声を上げて嗤いたくなるのを堪えて、マサキの耳に囁きかけるべく身を屈めた。彼が自らの秘めたる欲望と戦っているのは明らかだった。ならば、シュウのすべきことはひとつだけ。
「それが返事でしょう、マサキ。ほら……」
仰がせたマサキの顔に自らの顔を重ねていったシュウは、再び辿り着いた彼の口唇

を時間をかけて味わった。
彼にとっても、シュウとの秘め事は忘れがたい記憶として身体に刻まれていたようだ。されるがままでいたのは最初だけ。少しもすれば、自ら口付けを強請って舌を絡めてくるまでに積極的な姿勢をみせるようになったマサキに、どうしてシュウが自らの欲望を抑えきれたものだろう？
舌を咥え、深く飲み込んでゆく。
マサキの身体をベッドに横たえ、口唇を肌へと滑らせる。うなじから耳。耳から首。首から鎖骨。鎖骨から胸。胸から脇。脇から腰へ……肢体に絡み付くトレードマークの衣装を脱がせながら、これが最後となっても後悔のないように、シュウはマサキの身体をひたすらに舐った。
そして、一糸纏わぬ姿となったマサキの足を開かせた。
――な……お前、まさか……
瞬間、顔を引き攣らせたマサキは、けれどもシュウの腕から逃れようとはしなかった。

嗚呼、彼はこの先の行為に微かな期待をしてしまっているのだ――訴えるようにシュウを見上げる瞳が潤んでいる。シュウは自身の男性器を彼の双丘の谷間にあてがった。先程までの愛撫で濡れそぼった菊座が、緩く伸縮を繰り返している。その中に。

――やだ、やだって。それは無理だ、ろ……

流石に事ここに至ってはマサキも抵抗をみせるが、今更止められる性(さが)でもない。シュウは力任せにマサキの抵抗を押さえ込んだ。剣技に優れる彼の力はシュウに勝る筈であったが、恐らくは彼自身の葛藤がその力を弱めてしまったのだろう。弱々しく藻掻いていたマサキが、やがて諦めたように手足を弛緩させる。シュウはマサキの身体を出来るだけ優しく抱き締めながら、己の男性自身をうねるマサキの蕾の奥に埋めていった。

小さく声を洩らしたマサキの口元が、やがて喘ぎ声を吐き出すようになる。

いつの間にか柔らかさを増した菊座が、柔軟にシュウの男性自身を受け止めている。その変化が例えようもなく愛おしい。シュウは長く、ただ長く、マサキの中に自身を留めた。もう本当に無理だと、マサキが根を上げるまで。

※　※　※

二度の経験はマサキをどう変えたのだろう。

その答えをシュウは知らないままだった。

破壊神サーヴァ＝ヴォルクルスを崇める邪神教団は裏切り者を許さない。ルオゾールという数少ない神官を喪った彼らは、当たり前のことながら、シュウをしつこく付け狙うようなっていた。

王室という大きな籠。籠の中の鳥が自由を求めて羽ばたいた先もまた、大きな籠の中であったのだ。

シュウは教団と戦う決心を固めた。シュウに忠誠を誓い、足抜けをしたサフィーネ。シュウへの恋慕の情で王室を捨てたモニカ。シュウに面白さを見出したテリウス。シュウの仲間になった彼らとともに教団の動向を探り、その行方を追い続ける日々。

その間のマサキは、ラングランに攻め込んだシュテドニアス軍勢との戦いに明け暮

れていた。

魔装機神操者として、そして十六体の正魔装機のリーダーとして、方々で華々しい戦果を上げる彼の活躍はシュウの耳にも届いていたが、さりとて迂闊に会いに行ける立場や境遇でもない。今日は西へ、明日は東へと、すれ違いを続ける日々。顔を合わせる機会に恵まれなかったふたりの道が再びひとつになったのは、つい先日のことだった。

顔を合わせれば憎まれ口を叩く。そんなマサキですら愛おしかった。

他人の知らない彼の顔を知っているという優越感。もしかするとヴォルクルスに操られたシュウを引き戻してくれたのは、そういったマサキとの記憶であったのかも知れない……シュウは引き返せないほどにマサキに執着している自分が、堪らなく滑稽で、堪らなく愚かな存在に思えた。

「何だよ、あんた……いきなり笑ったり……」

記憶が戻ることを期待してシュウが点けたテレビから流れるニュース数々。それを他人事のようにマサキは眺めていた。

右も左もわからない彼にとっては、戦後処理のニュースも他所の国の出来事ぐらいにしか捉えられないのだろう。それよりも、隣で書物を紐解いている男の方が余程気になるようだ。ちらちらとシュウの様子を窺っていたマサキは、突然口元を緩ませたシュウに即座に反応した。

「お腹が空きませんか？」

マサキのことを考えていたとも云えず、シュウは話題を逸らした。

「減った」

「なら、夕食の支度をしましょう」

地底世界について教えなければならないことは山ほどあったが、シュウはそれらについては言及するのを避けた。

一度にあらゆることを教えられても、脳も処理しきれまい。そうでなくとも自分の記憶が無いという異常事態に直面しているのだ。シュウとしては、マサキのの精神的な負担はなるべく減らしてやりたかった。

いずれ記憶を取り戻した彼は、酷い混乱に見舞われることだろう。シュウにはその

未来が予想出来た。

シュウとてそうだったのだ。ルオゾールに反魂の法で蘇られたあの瞬間。シュウは自身の過去の記憶の一切を失ってしまっていた。当然ながらマサキのことなど覚えている筈もない。ルオゾールに、或いはサフィーネに吹き込まれる過去を信じるしかなかったシュウは、蘇生直後で脳の働きが鈍っていたからだろう。正直、自らが犯した罪の数々に、そこまでの苦悩を感じることはなかった。

けれども、時間が経って意識が明瞭になってくるとシュウの感情は一変した。

徐々に蘇ってくる凄惨な記憶の数々。それらの全てが自らの身に起こったこととはにわかには信じられなかった。人知れず懊悩するシュウに、世界は過酷な現実を突き付けた。顔を合わせる相手の全てが、記憶が正しいことを示している。

シュウは自らの記憶を自分のものとして受け入れた。そして教団に強い怒りを抱いた。彼らを赦してはならない――……。

ソファから立ち上がったシュウは、ほら、とマサキをキッチンに手招いた。

「俺もやるのか？」

「ただテレビを見ているだけでは退屈でしょう」
「料理は苦手な気がする」
「いくら苦手でも玉葱の皮ぐらいは剥けるでしょう」
不安そうな表情でキッチンに入ってきたマサキの予感は正しかったようだ。
先ず、玉葱の皮の終わりが判断できない。終わりなく剥き続けるマサキに、どういうことかとシュウが尋ねてみれば、彼は緑色の部分も皮だと認識したらしかった。
記憶の欠如が原因であったとしても、物には限度がある。シュウはどうマサキを扱うか悩んだ。これでは包丁など危なくて持たせられたものではない。
「これが何かはわかりますか」
「見たことがある気はする」
「こうやって使えば、野菜の皮が剥けるのですよ」
云ってピーラーと人参を渡してみれば、こちらもやはり皮の終わりがどこになるのかわからないようだ。どこまで剥けばいいのか尋ねてくるマサキに、シュウは薄皮一枚でいいと教えた。危なっかしい手付きではあったが、綺麗に人参の皮を剥いてみせ

たマサキに、何処まで皮を剥けばいいのか教えた上で、今度はじゃがいもの皮むきを任せる。

きっと元来は器用な性質であるのだ。

そう時間も経たぬ内にピーラーの扱いに慣れたマサキに、何故だか微笑ましい気持ちになりながら、シュウは彼が下処理をした具材を使って調理を進めていった。

「あんた、案外料理が出来るんだな。旨そうだ」

野菜たっぷりのミネストローネとチキンソテー。パンにサラダが揃った食卓。あまり仲間と食事をともにしないシュウにとって、他人がいる食事の席は久しぶりだった。ひとり増えただけでも賑やかな夕食の席。それはきっと、そこにいるのがマサキであるからこその華やかさでもあったのだろう。

「ところで、あんたがさっき読んでたのは何の本だ」

「流体力学の本ですよ」

「何を云ってるかさっぱりわからねえ」

そう云って呆れたような表情をしてみせたマサキは、相当に腹が減っていたようだ。

あっという間に食事を平らげると、更にスープを二杯おかわりして、「やっとひと心地付いた気がする」と、屈託のない笑顔を浮かべてみせた。

自分を大きく見せたがる少年だった。

戦いに明け暮れる日々で等身大の少年らしさを捨ててしまったのか。それともそれだけシュウを油断ならない男として認識していたのか。マサキがシュウの目の前でしてみせる表情は、童顔な彼の顔立ちには不釣り合いなものが多かった。

良くマサキはシュウの表情をすかしたと表現したものだが、自身のそういった表情を鏡で見ることはなかったのだろうか。瞼を少し落として口の端を吊り上げる様や、顎を上げて下目がちに他人を眺める様などは、彼とて充分に気取っているとシュウに思わせてくれたものだ。

気の置けない仲間を前にしても、どこか飾っている。

不意を突かれた時でもなければ見せることのないマサキの年齢相応の無邪気な表情は、だからこそシュウの胸を騒がせた。

それは良かったですよ。シュウは努めてさり気なくテーブルを立った。食事を終え

て満足しきった様子でいるマサキが、すごぶる旨しそうな獲物に見えて仕方がない。彼に無体を働かぬ為にも、理性が利く内に彼を視界の外に押し出さなければ……ひとり寝室に向かったシュウは、クローゼットの中からマサキの夜着に使えそうな衣服を見繕った。そうしてキッチンに取って返す。

「先にシャワーをどうぞ」

シュウの姿が見えなくなったことで不安を覚えたのだろう。心ともない眼差しを周囲に向けているマサキに衣服を渡しながら勧めれば、彼は後ろ髪をどう扱えばいいのかわからないようだ。髪は。と、ひとこと口にした彼にシュウはガーゼを取って傷痕を確かめた。まだ傷口は生々しい。

「水をつかわずに髪を洗えるシャンプーとリンスがありますから、今日はそれを使うことにしましょう」

世界各地を転々とする生活では、湯船に浸かるのは元より、シャワーひとつでさえも浴びれることは稀だった。だからこそ常備していたシャンプーとリンス。それらをマサキに持たせて、バスルームへと追い立てる。

「私に気兼ねをすることはありませんから、ゆっくりシャワーを浴びてくるのですね。今日のあなたは長時間の戦闘を終えた後。疲れを取る為にも、きちんと時間をかけなさい」

こくりと頷いたマサキがキッチンを後にする。

途端に賑やかさの失せた室内。ひとりきりになった空間で、シュウはこれからのことについて考えた。

記憶がなくとも生活が出来ることへの安心感からだろう。マサキはこの特殊な環境にも慣れつつあるようだ。何せ彼は地上から召喚されて直ぐに、魔装機を操縦して出撃するぐらいに神経が図太い性質であるのだ。未知なる状況への適応能力の高さは折り紙付きだ。

それよりも――シュウはリビングのソファに場所を移した。

そうして深く溜息を吐いた。問題は自分の方だ。シュウは度々自らを襲うマサキに対する衝動的な欲望を、どう処理すべきか悩んでいた。

ベッドはひとつ。

王室時代の広いベッドを好んだシュウは、余程の差し迫った事情がない限りは、旅先でもクィーンサイズ以上のベッドを寝床とした。狭いベッドだと神経質な性質も手伝って寝つきが悪くなる。だからこそ置いてある特注サイズのベッド。大の男がふたりで並んで横になるのに丁度いいぐらいの大きさではあったが、だからといって、マサキと枕を並べて二人で寝る訳にもいくまい。

シュウは自身の理性に自信が持てないのだ。

身体に刻み込まれている情交の記憶。あれ以上の快楽をシュウは知らない。知識の獲得や情報の摂取に勝る快絶。切なくも甘やかに心を溶かすマサキとの記憶は、シュウの理性を確実に蝕んでいる。

口唇を奪われたことを知っていると表現したマサキ。今の状態の彼であれば、シュウの欲望の全てを受け入れてくれるかも知れない。そう、彼は元来そういった嗜癖を有する人間であるのだ……ちらと脳裏を過ぎった都合のいい考えを、けれどもシュウはすぐさま打ち消した。幾ら誂えたような舞台であっても、物には限度がある。悪魔的な誘惑を拒めるぐらいの自尊心は残されている。暫くはソファで休むことにしよう。

シュウは自分の枕とブランケットをリビングに持ち込んだ。

そもそも実験だ開発だという生活になれば、三日ぐらいは寝ないのが当たり前である。今更、一日ぐらい眠れぬ夜があったぐらいで、倒れるほどやわな身体でもあるまい。ソファを寝床として整えたシュウは、立ったついでと一向に報告に姿を見せないチカの様子を窺いに書斎に向かった。

「まあ、これでもあたくし気遣いは出来ますので」

開口一番、主人の神経を逆撫でする台詞を吐いた使い魔は、システムを器用に弄ってラジオの音を書斎に流していた。

一匹でいると話相手が欲しくなるのだそうだ。ラジオのの音声に向かってああだこうだと蘊蓄やら講釈やらを垂れ出したチカに、誰に似たのやら――と、シュウは肩をそびやかした。黙っていることが耐えられない彼と異なり、シュウは口を開くべき時を心得ているつもりであったし、彼のように品性を疑われる単語を口にすることはなかったのだが。

「それで、あちらの動きはどうなっていますか。流石にシュテドニアス軍との交戦状

況ぐらいは把握していると思いますが」
「それがおかしなことに、目立った動きがないんですよ。大分持ち直したとはいえ、情報局も立て直しの最中だからなんですかね。彼らのお家芸であるデータ収集が上手く機能していない感じがあります。まあ、軍部が後始末にてんてこ舞いなのもあるんでしょうけど。未確認情報が錯綜していて、そちらの確認に忙しそうで」
「つまりどちらもサイバスターの状態を掴んではいないと」
「ほら、もうじき和平条約調印式が近いじゃないですか。それでシュテドニアスの民衆の間で、属国化するなんて噂が出回ってるみたいで。経済状況の悪化を懸念した一部富裕層が、他国への亡命を希望するなんてケースもあるらしく。下手な遺恨を残したくないラングランとしては、噂の火消しに追われてるってところですかね」
「成程。つまりセニアがサイバスターの所在不明に気付くには、まだ時間がかかりそうだということですね」
「それどころじゃないってのが本音なんじゃないですか。調印式目前になってもマサキさんが帰ってこないとあっては、流石にあちらも動くだろうとは思いますけど、何

せ国内に残っているシュテドニアス軍の全容もまだ把握出来ていない有様ですよ。そこにこの騒ぎじゃ。そもそも監督権を持ってるとはいえ、正魔装機そのものは独立自由軍みたいなもんですしね。彼らに構って足元を掬われるじゃ、笑い話にもならない訳で」

そういった状況にあるのであれば、情報局や軍部が主体的にサイバスターの捜索に乗り出すことはないのかも知れない。

シュウは幾許か心を軽くした。シュウの双子の従妹の片割れは、気の強さばかりにフォーカスされがちではあったが、あれで恐ろしく有能な女傑である。

魔力を持たぬが故に、機械を機械として正しく扱えるようになったセニア。彼女ほど論理飛躍演算機（デュカキス）を正しく扱える人間はいない。彼女の手にかかれば、シュウの現在地を導き出すことぐらい造作ないこと。

だからこそ、シュウはセニアの関与を恐れた。シュウがマサキを助け、この場に匿ったという事実は揺らがない。セニアであればその行動から、シュウのマサキに対する疚しい気持ちさえも看過してみせることだろう――……。

けれどもそれは杞憂に終わりそうだ。
「わかりました」シュウはチカに書斎を出るように促した。「あなたには迷惑をかけましたね、チカ。ここからは好きに過ごして結構ですよ。暫くはここにいることになるでしょうしね」
「そうは云っても、この家にあたくしの居場所はないように思えますけど」
どこで覚えてきたものやら。そう云ってふひひと笑ったチカを、シュウは無言で書斎の窓から外へと追い出した。
ローシェンを模した見た目の愛らしさとは裏腹に悪童気質。この調子では、マサキを目の前にして『うっかり』口を滑らせることもあるだろう。記憶のないマサキに余計な情報を吹き込まれては、彼の保護に悪影響を及ぼしかねない。
だからこその実力行使。シュウは閉ざした窓にしっかと鍵をかけ、リビングへと戻った。
「わかってたけど、あんたの服はでかいな」
ややあってリビングに姿を現したマサキに、シュウは目を瞠った。

袖や裾の余りを折り返して尚、体格差を感じさせる衣装。劣情を煽って仕方のないマサキの格好に、あまり側に寄らないで欲しいものだと思いつつも、初めて目にした姿に視線を逸らせない。

シュウは表情を取り繕った。二、三日の辛抱だ。そう云い聞かせて、マサキに座るよう促す。

シャワーを浴びている間に用意された枕とブランケット。ソファの端に置かれているそれを見て、マサキは事情を察したようだ。「あんた、ここで寝るつもりなのか」警戒心も薄く、素直にソファの隣に収まった。

「ベッドはひとつしかありませんからね」

「だったら俺がこっちで寝るぞ。世話になっているのは俺の方だし……」

風呂から上がったばかりの肌がしっとりと濡れている。

襟元から覗いている浮き出た鎖骨がなめかましい。シュウは視線を動かした。掴みやすそうな手首といい、抱えやすそうな腰といい、そこかしこから色香が漂っている。流石に目の毒だ。シュウは不躾な視線をマサキに向けるのを控えた。

もう少し自分に対して警戒心を抱いて欲しいものだ……マサキにとって自分が安心出来る類の人間ではないと自覚しているシュウは、だからこそ抗い難い欲望を抑えるべく正気を振り絞った。

記憶が戻った際に、記憶がないからこそ好き勝手にされたなどと思われるのは、さしものシュウであっても癪に障る。

「頭部に怪我を負っているあなたを、ここで寝かせる訳にはいかないのですよ」

やんわりと拒絶の意を示してみれば、でも……と言葉を濁す。

「……一緒に寝る訳にはいかないのか。その、あんたが良ければ、だけど。俺だけいい身分ってのも気拙いだろ。それだったら平等なんじゃないかって思うんだが」

思いがけない提案に、シュウは驚きを表に出さないようにするのが精一杯だった。

世話になっている身であるという事実が、あの尊大なマサキをしてここまで殊勝にさせてしまっている。まるで自らに捧げられた供物のようだ。シュウは弱々しささえ感じさせるマサキの姿に喉を鳴らした。

いっそ、このままマサキを自分のものにしてしまえたら。

きっとそれはシュウが思っているより容易いことだろう。けれども……シュウは胸の内で言葉を継いだ。果たして、そのマサキはシュウが欲しているマサキ＝アンドーであるのだろうか？

シュウ自身、記憶のあるなしで変化する人格には心当たりがあった。ルオゾールの反魂の法。経験によって変容した後天的な気質を記憶とともに失ったシュウは、だからこそ取り戻された記憶に違和感を覚えた。

自分のことでありながら、自分のことではないような感覚。長らくシュウを苦しめたその感覚は、シュウが自身の記憶を受け入れるにつれて収まりをみせた。

きっと、シュウが自覚を持ったことで、人格と記憶の統合が進んだのだろう。今となっては、あれは他人であったと思うまでに、記憶を失った自分はシュウにとって理解が及ばぬものである。

それがマサキの精神世界に起こらないと、どうして云えたものか。

彼がシュウに警戒心を抱かずにいるのは、彼の記憶がそれだけ失われているからだ。シュウはサーヴァ＝ヴォルクルスとの決戦の舞台で顔を合わせたマサキを思い返した。

二度の秘め事を忘れたがっていたマサキ。彼が平然とシュウを目の前にして振舞ってみせたのは、その出来事をなかったことにしてしまいたいからに他ならなかった。だからこそ、シュウは迷うのだ。記憶を取り戻せば、彼はシュウに対して警戒心の強いマサキ＝アンドーに戻ることだろう。そうなれば、易々とシュウが手を触れられることはなくなる。

ジレンマだ。シュウは重苦しい感情がせめぎ合う胸の内を、覚られぬように微笑を浮かべてみせた。

あれだけ泣き喘いでみせた彼が、そう簡単に欲を捨てられる筈がない。

――いずれまた、彼は自分を求めるだろう。

何より人生は長い。モラルに拘りさえしなければ、彼に触れられる機会は幾らでもある筈だ……そう自分に云い聞かせながら、「大丈夫ですよ、マサキ」シュウはマサキに向き直った。

「私は寝る間際の時間を読書に割くのが好きなのですよ、マサキ。時には明け方近くまで時間を費やしてしまうこともあるぐらいです。そうである以上、きちんと睡眠を

取らなければならないあなたがベッドを使うのが道理ですよ。私の趣味であなたに眠れぬ夜を過ごさせる訳にはいきませんからね」

「だけど……」追い縋るように口を開いたマサキの言葉をシュウは遮った。

「ここでならあなたに気を遣わずに読書が出来るのですよ。ですから気にしないでください、マサキ。今のあなたがするのは自分の心配だけでいい」

そして、納得いかない表情で物云いたげにしているマサキの髪を撫でる。シャワーを浴びる際に飛沫がかかったのだろう。彼の艶やかしい髪の毛は微かに湿気を含んでいた。

「飛沫を浴びたのですね。乾かしましょう」

「大丈夫だろ」

かつてのマサキを彷彿とさせる口調。ぞんざいなマサキの口振りにシュウは微笑ましい気持ちになった。

記憶が無くともマサキはマサキなのだ。

それなら自分は耐えられる。マサキの口振りに希望を見出したシュウは、ほんのり

と香料の匂いが漂わせている彼の髪を指で梳(す)いた。そして、滑らかな感触に誘われるがままにその毛先を指で弄んだ。

「このぐらい、どうってことないだろ。心配性だな」

屈託のない笑顔が愛くるしい。曇り気のない瞳。マサキの邪気のなさに、先程まであった欲望が溶けるように消えてゆく。これでいいのだ。シュウは清らかな気持ちでマサキの髪から手を離した。

けれどもその瞬間、マサキの態度が変わった。膝に落とされた視線。物云わぬ彼はどこか思い詰めたような表情で、膝頭の辺りを見詰めている。

「どうしました、マサキ――……」

ややあって顔を上げたマサキの手が、シュウのシャツの襟元に伸ばされる。まさかと思うも、否定したい気持ちが勝った。

様子を見守るだけとなったシュウにマサキが迫ってくる。シャツの生地を掴んだ彼はそのまま身を乗り出してくると、シュウの口唇に自らの口唇を重ねてきた。

唐突な出来事に、咄嗟には反応出来ない。

シュウにされた口付け以外の方法を知らないからだ。口唇を啄(ついば)んでくるだけのマサキは、けれどもそれを止める気配はなく。

ゆるゆるとシュウの胸に実感が湧き上がってくる。あのマサキが、記憶がないとはいえシュウを自ら求めている。シュウは迷った。このマサキはあのマサキではない。わかってはいても、彼の口唇の温もりは抗い切れない誘惑なってシュウの胸をさんざめかした。

口付けの合間。シュウを見上げてくるマサキのあざとくも感じられる表情。彼の潤んだ瞳に流石にシュウの我慢も限界だ。シュウはマサキの顔を引き寄せると、次の瞬間には深く口唇を合わせていた。

薄く開いたままのマサキの口唇に舌を差しいれ、熱く濡れた口腔内を探る。懐かしくさえある彼の舌を捕えたシュウは、潤った彼の舌に思うがままに自らの舌を絡ませていった。

ん……と、小さな声が口唇の合わせ目から洩れる。

シュウの舌を感じた瞬間こそ身体を硬くしたマサキだったが、それは僅かな時間だっ

た。シュウからの口付けを受け入れたマサキは、何かに取り憑かれたようにシュウの舌の動きに応えてきた。荒らぶる呼吸。彼の口の端から洩れた吐息がシュウの頬にかかる。それは冷えた肌が溶かされてしまいそうなほどに熱かった。

紛れもない。マサキはシュウの口付けを欲していた。

情熱を傾け、欲望を晒し、ひたすらに――。どういった思いからマサキが口付けてきたのか、シュウにはその理由はわからなかったが、ここまでの餌を与えられてそれを貪ることもないままに済ませられるような性格でもない。シュウはマサキが記憶を失っているからこその素直さを、躊躇うことなく利用することにした。

そうして――、長い口付けの終わり。そうっと口唇を離したシュウを、とろんとした眼差しが捉えている。良かったの。訊けばこくりと頷く。それでも消えない謎。思う存分マサキの口唇を味わったシュウは、頬を包んだ手でマサキの顔を仰がせた。

「何故、こんなことを」

「思い出すかと思った」

予想だにしていなかった答えに、シュウは苦笑いを浮かべずにいられなかった。

自分と同じ性別を持つ相手に喘がされ、快楽の渦へと突き落とされる。そして絶頂へと導かれては果て、果ててはまた喘がされる……たった二度の過ちの間、マサキはどれだけ官能的な表情をシュウの目の前に曝け出してみせたことだろう。

緩む口元を引き締めることもせず、切なくも甘い声で鳴き続けてみせたマサキ。日頃の勝ち気な態度はどこにやら。全身をシュウの欲望の餌食とされた彼は、それによって自らの欲っするものを思い知らされてしまったのだ。

――それはマサキからすれば、記憶の底に沈めておきたい記憶であることだろう。だのに記憶の無いマサキは無邪気に振舞ってみせるのだ。記憶を取り戻したい。たったそれだけの動機でシュウに自ら口付けてくるまでに。

これが喜劇でなければ何が喜劇だろう！　シュウは自身の経験を今一度振り返った。記憶が無くなっただけで人は変わる。そこに現れ出るのが生来の気質だ。記憶のあるマサキとは雲泥の差な今のマサキ。彼は先天的には無邪気な性質であったのだ。

それが何某かの経験で矯正されてしまった。

けれども、シュウが欲しいのはそのマサキなのだ。

自らの立場と欲望の間で葛藤し、それでも最終的には快楽に屈してしまう。だからといって、自ら求めるまでに従属することはない。まるで薄氷の上で踊っているダンサーのようだ。儚い抵抗をしてみせるマサキは、シュウとの行為と引き換えに失うものの重みを知っていた。

僅かに刺激を与えるだけで心を揺らがせる危うさを孕んでいる少年。鋼のようにしなやかな意思を持ちつつも、人間らしい愚かさや弱さをも持ち得ている少年。彼が極限で発揮する力は、極北の地に降り注ぐ白光のようだ。

眩くて、輝かしい天からの光。それがどうして魅力的に映らないものか。

目の前のマサキに見入りながらも、シュウの胸に訪れる寂寥。自分はこのマサキでは駄目なのだ。わかっていても彼に欲情せずにいられないのは、その姿がマサキ＝アンドーそのものであるからだ。そう、シュウはマサキの内面に限らず、を構成する外見的な要素にまで反応してしまっている。

危ういのは自分自身の方だ。いつしか誤魔化しきれないまでに熱を帯びてしまった自身の手。シュウはそれをマサキの頬からいつまでも離せずにいた

「あんた、本当に不思議な奴だな。さっきまであんなだったのに、今は押し黙って……」
そう云ったマサキがシュウの手に自らの手を重ねてくる。かってのマサキを彷彿とさせる真っ直ぐな瞳。その中に映り込んでいるどこか物憂げな自分の表情。シュウは言葉を継げぬまま、黙ってマサキの瞳を凝視(みつ)めた。
「俺に記憶があったら、あんたはそんな表情をしなくとも済むのかな」
シュウははっとなってマサキの頬から手を外した。
記憶がなくとも、マサキはマサキであるのだ。シュウの物煩いの原因を早々に見抜いてみせたマサキに、それが彼の特性でもある直感の為せる業だとわかっていても胸騒ぎがしてならない。
――自分はこれほどまで簡単に他人に心を見透かされるような人間であっただろうか。
マサキ＝アンドー、或いは安藤正樹。彼を目の前にしたシュウは心を狂わされる。それは記憶のないマサキであっても同様なのだ。シュウはマサキへの感情をさっぱりいなせずにいる自分に、溜息を吐きたくなる思いに囚われた。

だからといって、それをこの少年の前であからさまにする訳にもいかない。シュウにも年長者の意地と自尊心（プライド）がある。彼を裏切ってはならない。シュウは稚ささえ感じさせる記憶のないマサキに庇護欲を持ち始めていた。

だからこそシュウは、平静を努めた。

「余計な物煩いをさせてしまいましたね」

「別に物煩いなんかじゃ」

「お気になさらず。大丈夫ですよ、私は。それより眠くなるまでテレビでも見ては如何ですか。私もそろそろシャワーを浴びなければなりませんし」

あ。と、声を上げたマサキが、壁に掛かっている時計に目を遣った。

「そうだよな。もういい時間だ。忘れてたよ、ごめん」

素直に謝罪の言葉を吐くマサキは、相変わらずシュウの目には殊勝に映った。

記憶のあるマサキであればどう反応してきただろう。ソファから立ち上がりながらそれを予想しようとしたシュウは、そういったシチュエーションに対するデータが自身の知識や経験にないことに思い至った。敵と味方。捕食者と餌。碌な関係を築けな

いシュウとマサキの記憶は、穏やかならざるものも多い。だからこそシュウは、想像の付かないその世界に憧れを抱いた。いつかはその未来に辿り着きたい。

そこに至るまで、シュウとマサキはどれだけ感情的にぶつかり合わなければならないだろう。

果てしない道のりに闘志を燃やす性格であるシュウは、けれどもこの瞬間、そこにインスタントに触れられるマサキがいるという事実に気付いてしまった。そして、この状況が特殊であることを忘れかけている自分に気を引き締めた。

記憶がないからこその素直さや純粋さ、そして無垢さは、後天的な経験を削がれたからこその過去の姿でもあるのだ。

不意に降ってきた天啓。刮目したシュウは、現実を確認するようにマサキを振り返った。

このマサキの姿は二度と見られないものである。

記憶が戻れば消えてしまう人格が表に出ているマサキは、テレビに映し出される番組に視線を向けている。たったひとり増えただけで、温かみが生まれたように感じら

れるリビング。こんな日常があることを、これまでひとりで家で過ごすのが常だったシュウは知らなかった。

「眠くなったら、私の戻りを待たずに寝てください」

マサキにそう云い置いて急ぎリビングを出たシュウは、着替えの服を取りに行くこともなく。服を着たまま一足飛びにバスルームへと飛び込んだ。そう、シュウはマサキ本人でさえも知らないマサキを目にしている。しかも、記憶が戻るまでの間とはいえ、そのマサキを自分の手元に置いておけるのだ。

陶酔が洪水となって襲い掛かってくる。

どれだけ彼の隠された一面を目にすることになるだろう。シャワーのコックを捻ったシュウは、冷えた水を頭から被った。そうでもしなければ、理性を狂気に食い荒らされてしまいそうだった。

シュウの心を捕えたマサキ＝アンドーという少年は、記憶を失っても尚、シュウの心を手放そうとしない。

それがシュウにはとてつもない快楽だった。

※　※　※

環境が変わったからか、それともテレビの情報が物珍しかったのか。中々眠ろうとしないマサキを上手く云い包めて寝室に追いやったシュウは、束の間の精神の安息を得るべくすぐさま眠りに就いた。

明けて翌朝。微かな物音に目を覚ませば、キッチンにマサキが立っているのが見えた。どうやら昨日の夕食の残りのミネストローネを温めているようだ。温かな蒸気とまろやかな匂いが漂ってくる。

シュウの起床の遅さに待ちきれなくなったのではなかろうか。育ち盛りの少年に対しての気の遣い方がわからないシュウは、そこでようやくマサキの食事に気を掛けてやらなければならないことを覚った。

戦時中であってもきちんと食事を摂る少年だった。精神的にナーバスになり易い操縦者もいる中で、三食欠かさず食べるのみならずおかわりまでしてみせる彼。時に物

流難からレーションに切り替わることもある食事を、全て綺麗に完食してみせる人間はそういない。

それは腹を空かせて自らキッチンに立ちもする。

ソファから離れたシュウはキッチンに入り、マサキと声を掛けた。ぴくりと揺れる肩。振り返った彼は気まずそうな表情でいる。

「おはよう……その、ただ居るのも悪いし、何かしなきゃと思ったんだけど……」

彼の手元を覗き込めばフライパンの中に、少し焦げたベーコンと目玉焼きがあった。そこまで料理が得意ではないシュウからすれば充分に朝食として通用する焼き具合だったが、マサキとしては焦げてしまったことが気になるようだ。

「勝手にキッチンを使ってごめん」

「充分ですよ、マサキ。お腹が空いているのでしょう。このまま朝食にしましょう」

少し焦げたベーコンと、黄身の固い目玉焼き。そして昨日のミネストローネが並ぶ食卓。マサキを正面に食事を進めながら、シュウは今日は何をして過ごしたものかと頭を悩ませた。

ひとりであれば読書や研究をして過ごしたものだが、いつも通りの生活ではマサキが退屈を感じることだろう。なるべく早く記憶を取り戻させる為にも、刺激がある生活の方がいい。それなら……と、シュウはマサキが着ている己の服に目を遣った。

だぶついた服に包まれている身体が、相変わらずしどけない。

今日はこの目に毒な格好を改めさせることにしよう。そう考えを固めたシュウは、「皿洗いぐらいはするよ」と再びキッチンに立ったマサキにテーブルの片付けを任せ、自身はリビングのソファを片付けることにした。

乱れたブランケットを畳み、枕とともにソファの端に寄せる。今日のラングランも澄みやかな空が広がっている。カーテンを開いたシュウは、温かい太陽の光を全身に浴びながら換気ついでと窓を開いた。

ふわりと吹き込んでくる風が心地よい。

「おはようございます、ご主人様」

昨夜は庇(ひさし)で寝たらしい。頭上から降ってくる声に面を上げれば、昨晩の罪深い主人の醜態を覗いていたようだ。庇(ひさし)の上からそっと顔を覗かせたチカが、「あまり感情移

入はなさらない方が賢明だと思いますがねえ」と、釘を刺してくる。
「心得ておきますよ」
「本当ですかァ？」
　いざとなれば使い魔の自分をも平気で謀ってみせる主人は、チカにとって余程信用ならない存在であるのだろう。千切れんばかりに首を捻った彼は、続けてシュウの肩に舞い降りてくると声を潜めた。
「わかってるんだかわかってないんだか知りませんが、ご主人様がマサキさんを助けたのは昨日の午後ですよ。い・い・で・す・か・？　昨日の午後！　それでその日の夜にはあの有様って、手が早いにも限度ってものが――」
「喋るんだな、その鳥」
　どうやら皿洗いを終えたようだ。シュウが振り返ると、目を丸くしているマサキの姿がある。
「使い魔というのですよ。ほら、チカ。挨拶を」
「知っている人間に初対面の挨拶をすることほど、難しいことはありませんね」チカ

は羽根を広げて諦めたように首を振った。「あたくしの紹介はご主人様にお任せしますよ。マサキさんがこんな状態では調子が狂います」

主人が長逗留になると踏んだのか。そのまま、脇目もふらずに空へと羽ばたいていく。「使い魔って何だ?」遠ざかる青き後ろ姿。その軌跡を目で追いながらマサキが尋ねてくる。

「魔術で生み出された魔法生物ですよ。そうですね、小さな助手とでも呼べばいいでしょうか。私としては認め難い思いもありますが、彼らは主人の無意識の影響を受けた存在です。分身のようなものですね。ああいった姿形ですから、させられる作業には限りがありますが、それでも頼りになるパートナーです」

わかったような、そうでないような表情でいるマサキを取り敢えず脇に置いて、シュウは話のついでと、気を失ったままのマサキの二匹の使い魔の様子を見ることにした。

リビングの隅、バスタオルの上で伸びているシロとクロ。脈拍、体温はいずれも正常値。しかし、昨日から変わることのない姿勢。凡(おおよ)そ猫らしからぬ体勢で固まっている辺り、行動不能に陥ったままなのは間違いない。

やはり――と、シュウは溜息を吐いた。どういった理屈が働いたものか不明だが、彼らはマサキの記憶が失われたことでその機能を失ってしまったのだ。
「これもあんたの……その、使い魔、なのか？」
シュウの背後から二匹の使い魔を覗き込んでいるマサキが尋ねてくる。口調から察するに、シュウの説明では良く飲み込めなかったようだ。ない知識を理解出来るように説明する難しさを感じつつも、シュウはマサキの疑問に答えた。
「これはあなたの使い魔ですよ、マサキ。サイバスターの制御に必要な大事な使い魔です」
恐らくは使い魔のイメージが上手く掴めていないのだろう。内容を飲み込めていない表情。彼は小首を傾げながら、しげしげと二匹の使い魔を見詰めている。
「猫の姿にしか見えないけど、どうやってこいつらであんな巨大な機械の塊を制御するんだ」
「魔法生物ですからね。肉体を持っているように見えても、実際は違うのですよ。そうですね、精神体と云った方がわかり易いでしょう。彼らは精神を同調させて魔装機

をコントロールします。とはいえ、あなたの操縦能力には遠く及びませんがね」
「わかったような、わからないような……」
「今はそれでいいのですよ、マサキ。記憶が戻れば自明のこととなるのですから」
シュウはマサキを振り返った。
「それよりも、着替えを渡さないとなりませんね。このまま夜着で活動させる訳にはいきませんし」
シュウは寝室に向かい、適当な服を見繕ってマサキに手渡した。
そして自分も着替えに取り掛かる。
ひとりでは溜め込む洗濯物も、ふたりとなれば倍量だ。しかも長く使っていなかった隠れ家。締め切りにしていた家の埃はそうでもなかったが、あまり気分のいいものではない。洗濯と掃除を終えたら街に出ることにしよう。
この後のスケジュールを考えながらシュウが着替えを進めていると、先に着替え終えたようだ。マサキが脱いだ服をどうすべきか尋ねてきた。
「脱衣所の洗濯機の中に放り込んでおいてくだされば結構ですよ」

振り返った瞬間に鎖骨から覗く傷痕がマサキの目に触れたようだ。「その傷……」と、彼が口にする。

引き攣れた皮膚に胸まで走る裂傷。シュウにとっては決して好んで口にしたい由来ではなかったが、生々しい傷跡を目の当たりにして、それをないものとして振舞われる方が辛くもある。いっそ、この機会に打ち明けてしまえたら……そうも思うも、記憶のないマサキに背負わせていい内容でもない。

「長く生きていれば、このぐらいはね」シュウは口元を歪めてみせた。

シュウの言葉を、マサキはマサキなりに納得のいくように解釈したらしかった。そうだよな。ややあって頷く。

「あんな大きな人型汎用機（ロボット）に乗って戦ってるんだ。そりゃ、傷のひとつやふたつぐらい付くよな……」

その現実が、マサキにとっては衝撃的だったようだ。眉根を寄せて考え込む素振りを見せたマサキに、記憶がないからこそ葛藤するのだろうとシュウは敢えて声を掛けるのを避けた。何を云っても慰めにはならない。それがこれから彼が立ち向かわなけ

ればならない現実――記憶を戻す上では避けて通れない話題であると思ったからだった。

けれども、シュウが着替えを終える頃ともなれば、彼はそのことについて考えるのを止めたのか。それとも納得する答えを見付けたのか。まるで待ち構えていたかのように口を開く。

「なあ、洗濯機ってどう回すんだ」

何かに専念していないと、余計なことに気を取られてしまうのだろう。朝食の支度の次は洗濯と朝から忙しないマサキに、かといってあれもこれもやらせるのは気が引ける。シュウは無言で脱いだ服を手に脱衣所に向かった。

ひとりになるのが不安らしいマサキが後を付いてくる。

昨晩もそうだった。何やかやと理由を付けて寝室に行くのを嫌がったマサキを、シュウは時間をかけて説得して、やっとの思いで寝室に送り込んでいる。

「なあ、あんた。洗濯機の回し方、教えてくれよ」

記憶をなくして初めて目にした人間がシュウであったからこその懐き具合。洗濯機

に服を放り込んだシュウに纏わり付いてくるマサキに、本当に雛鳥のようだ。シュウは口元を緩ませた。

――けれども悪い気はしない……。

孤独を好むシュウは、けれども完全な孤独を厭った。人は誰かの助けなくしては生きられない。サーヴァ＝ヴォルクルスの支配を受けたシュウは、王室や教団のドライな人間関係でそれを思い知った。

誰もシュウを助けなかった九年間。

絶望の淵に沈んだシュウを助けてくれたのはマサキだった。

置けるものなら、シュウは彼を傍に置きたかった。けれども彼には魔装機神操者という立場がある。そう簡単にシュウの許に駆け付けられない彼に頼るのには限度があった。

だからこそ、シュウは他に頼れる仲間を持つ必要があったのだ。

チカや仲間を傍に置いているのは、枯れ木に花咲くぐらいには賑やかたれと思ってのこともあったが、いざという時に身体を張って守ってくれるのは彼らをおいて他に

ないと、シュウ自身が強く思っているからでもあった。
彼らはシュウの意思表示に逆らったりはしない。
今のところ、総じてシュウの思惑通りの役目を果たしてくれている彼ら。けれども彼らはシュウを仲間以上の何かと認識しているようである。時として強い執着心を自身に向けてくる彼らを、シュウは上手くいなせていない。
シュウの所在不明が長引けば、彼らは捜索を始めることだろう。
いつここに彼らが押しかけてこないとも限らない彼ら。いつもなら寛容でいられる現実が、けれども今のシュウにはひたすらにうっとおしい。
「朝食の支度だけで充分ですよ」
シュウは洗濯機のスイッチを入れながら、傍らに立つマサキに微笑みかけた。
「洗濯は私がやります。どうせ回すだけですしね。その間にこの家の掃除も済ませなければ」
「掃除は手伝わせてくれよ」
「触られたくないものがあるのですよ」粘るマサキの頭をシュウは撫でた。「終わっ

たらあなたの当座の衣服を買いに行きましょう。私の服では手足が余っていけない」
「別に……どうせ、直ぐ記憶が戻るんだろ。俺はあんたの服でいいよ。短い期間の為にあんたに金を使わせるのも悪いしさ」
「気を遣わずとも結構。これも貸しです」
「後が怖いじゃねえかよ。何を返せって云われても、記憶が戻らなきゃ返せねえ」
傍若無人な彼からは想像も付かなかった言葉の数々。それが早くも微笑ましく感じられてしまうようになっている。
このままでは良くない。シュウはマサキの頭から手を離した。そしてチカの忠告を反芻した。
――あまり感情移入はなさらない方が賢明だと思いますがねえ。
全くその通りだ。静かな音を立てて回り始めた洗濯機に、次は掃除に手を付けねばとシュウはリビングに向かった。
今しか見られないマサキの表情や態度、そして今しか聞けない言葉の数々に、シュウは心を掴まれてしまっている。他人が知ることのない記憶を失ったマサキ。それは

シュウにマサキの新たな魅力を気付かせるものでもあった。
「テレビでも見て待っていてください。直ぐに済ませますから」
リビングに戻ったシュウは壁に掛かっている毛帚を手に取った。そして家具の埃を取りながら、マサキにソファを進めた。
「いや、でも、あんたにばかり働かせて……」
居心地が良くないのだろう。ソファに座ることをせず、シュウの近くに立ち続けるマサキに――そう云えば、彼はあれで律義な性質だったとシュウは思った。胸に立てた誓いを違えることのないマサキ。その律義さがあったからこそ、シュウは救われることが出来たのだ。
「私の家なのですから、私が掃除をするのは当たり前のことでしょうに」
「そうなんだけどさ……なんか、落ち着かない」
「なら、こうしましょう。後で食事の支度の手伝いをしてもらいます。これでどうです」
けれどもマサキはシュウの傍を離れようとしない。掃除を続けるシュウの後をちょ

こまかと付いて回ってくる。
「床の掃除ぐらいはいいだろ。他のものには絶対触らないから」
そうして、シュウの顔を覗き込んでは必死になって食い下がってくる。
「そうは云っても、洗濯機の使い方がわからなかったあなたに、掃除機の使い方がわかるとは――」
まともにかち合った視線に、ふと悪戯心が芽生えた。手を焼かさていることへの意趣返しも兼ねて、彼の口を塞いでしまおう。
マサキ、シュウはその名を呼んでマサキに向き直った。
きっと手伝いをさせてくれると思ったのだろう。微かに期待を宿した瞳。次の言葉を待っているマサキの頬に、シュウは手を添えた。それで彼は続く動作を覚ったようだ。少しばかり身体を硬くすると、それでも真っ直ぐにシュウを見上げてくる。
シュウはマサキの頬から手を上げて、瞼をそっと閉じさせた。
そして口唇を重ねる。
三度目ともなれば要領を得たものだ。シュウの背中に腕を回してきたマサキが、大

胆にも口唇を開く。シュウはマサキの口腔内に舌を忍ばせていった。ん。と小さな声を上げて、マサキが舌を絡めてくる。

最初こそ途惑いをみせたマサキは、シュウと口付けを交わすのをそれなりに気に入ったようだ。しっかとシャツの背中を掴んだ手もそのままに、ぴたりと身体を合わせて口唇に吸い付いてくる。シュウは差し入れていた舌を引いた。口付けに熱中しているマサキ、彼がどう反応するかを見たい。

ぴくりと身体を震わせたマサキが、おずおずとシュウの口唇を食(は)んだ。躊躇いがちなのは、シュウの意図がわからないからだろう。けれども重ねた口唇を離すことのないシュウに、機嫌を損ねたのではないと覚ったようだった。ややあって、シュウの口唇に舌を這わせてくる。

シュウはそのどれにも反応せず、ただ、マサキのしたいようにさせるだけとした。彼がどこまで貪欲に自分を求めてくるのかが見たい。どうしようもなく愚かな欲がシュウの心を支配していた。

少しもすると物足りなさを感じたのか。シュウの口唇を啄んでいたマサキが、自ら、

シュウの口腔内へと舌を差し入れてきた。直後にシュウの舌を捉えた彼は、自らの舌を緩く動かし始めた――……

シュウはマサキの腰に手を回した。見た目よりも細い彼の腰部がすっぽりと両手に収まる。咄嗟に思い出されたのは、あの夜のこと。決戦を近くしたロンドベルの艦内、彼のキャビンでシュウはマサキの肢体が、見た目よりも遥かに細いことを知ったのだ。

眩暈がした。

もう一度、あの夜を繰り返したい。シュウはマサキの舌を激しく浚った。口付けに溺れきっているのだろう。マサキの脚から力が抜けてゆく。それを両腕で支えてやりながら、シュウは更にマサキの口唇を奪った。口の端から洩れ出るマサキの吐息が、熱く頬を濡らす。その荒さが彼の興奮度合いを表していた。

息を継ぐのに口唇を離し、視線を絡ませてはどちらともなく口唇をまた合わせてゆく。終わりの見えない口付けに、どこかでは終わりにしなければならないと思ったようだ。やがてマサキはシュウから口唇を離すと、赤く染まった頬を隠すようにシュウの胸へと顔を埋めてきた。

「思い出せそうですか？」

「わからない。けど、あんたとこうしているのは嫌いじゃない……」

水か染み込むように自らの存在を受け入れていくマサキの素直さが、シュウは堪らなく愛おしかった。

このマサキはあのマサキとは異なり、シュウの求めを拒まない。拒まないどころか、自らの欲に正直にシュウを求めてくる。欲に溺れつつある彼はもしかしたら、今からシュウがこの場で押し倒したとしても、抵抗らしい抵抗をみせないのではないだろうか。

無垢な存在を自らの色を染め上げることほど、残忍な支配はない。シュウは自らの胸の内に眠る嗜虐的な欲望を自覚していたからこそ、不意に脳裏に過ぎったその妄想に心を囚われた。

しなやかな肢体を思うがままに蹂躙し、屈服させ、従属を得る。その時の彼はどう振舞ってみせることだろう。それを想像しただけでもシュウの胸は躍った。きっとその瞬間のシュウはこれまでにない歓喜を覚えるに違いない。

とはいえ、記憶の無いマサキにそんな無茶を強いるのはシュウの自尊心（プライド）が許せそうにない。

シュウは押し寄せてくるイメージの群れを払い除けた。

「満足したのならソファに行きましょう。私は掃除の続きを済ませますから」

それでマサキは今が掃除の最中であったことを思い出したようだった。

けれども、もうしつこく掃除をさせろとは口にしない。うん、と頷いた彼は大人しくソファに収まると、テレビのリモコンを手に取った。

シュウはテレビを見始めたマサキを置いて、他の部屋へと掃除に向かった。

鼓動が早い。脳が霞みがかっている。体中の血液が股間に流れ込んだような衝動を、記憶のない方のマサキに感じてしまった。シュウは自分が動揺しているのか、それとも獲物を捕食しようとしているのか、わからなくなってしまっていた。

このままでは、いつか自分は破綻する。

シュウは衝動的に顔を覗かせる自らの暗い欲望を消失させることが出来ないのだ。マサキが欲しい。たったそれだけの欲が、肥大を重ねてゆく。彼の全てが欲しい。シュ

ウは絶望した。それは姿形を同一とする記憶のないマサキにも向けられてしまっている。

そうでなくとも自信家なシュウは、万能感に包まれ易い。それは、シュウを時として酷く調子づかせるものでもあっだ。そもそも、シュウが自身の衝動性を完全には抑え込めないのにしても、万能感に包まれるがあまり、世の中が自分を中心に回っていると錯誤し易いからだ。

手酷い失敗犯しかねない自身の悪癖は、いつだって、シュウが気付くより先にシュウの身を犯している。だからこそ、シュウは一日も早く早く、マサキの記憶を取り戻さねば――と、改めて自身の胸に誓いを立てた。

それが素直に身を委ねてくる記憶のないマサキへの、唯一シュウがかけてやれる優しさだったからこそ。

※　※　※

ヌエット海の小島より東に二十キロほどの位置にある人口五万人ほどの街。昼どきのメインストリートは食事を求める人で溢れていて、記憶喪失となってから、シュウ以外の人間を目にするのが初めてなマサキは落ち着かない様子だった。

街を訪れるに当たって、シュウはマサキに変装を施していた。

僅かに髪を崩して、眼鏡を掛けさせただけの簡易的な変装ではあったが、日頃の活発なイメージもあってか。驚くほどに勤勉に映る。だからだろう。国内有数の知名度を誇る風の魔装機神の操者に気付く者はいないようだ。

「時間的にも丁度いいですし、今日はここで昼食にしましょう」

シュウはメインストリートの折れ口に向かった。

間口の広い、赤茶けたレンガ造りの建物は、シュウが街に寄った際に半分は足を運んでいる大衆向けレストランだ。ポピュラーなラングランの家庭料理であれば大抵はここで用が足りる。味も折り紙つきだ。その分、多少値は張ったが、それだけ出してもいいと思わせる魅力がこの店にはある。いつ訪れても座席が七割ほど埋まっている名店だ。

時間が時間なだけに、二十分ほど待つことにはなったものの、他の人気店と比べれば圧倒的に回転が早い。マサキとともに窓際の角席に着いたシュウは、見知らぬ料理名が並ぶメニューに完成品の想像がつかなかったらしい。「どうせなら食べたことのない料理がいい」というマサキからのリクエストに、メルーラムのナヴァランを注文(オーダー)した。

「柔らかいな。噛むとほろほろと崩れてく。味がしみてて旨い」

柔らかくて甘いラム肉を、酸味の強いトマトで煮込んだメルー羊のナヴァラン。かつてのラングランでは相当にポピュラーな家庭料理だったらしく、各家庭に独自のレシピが伝わっているとも聞く。

「メルー羊のラム肉は希少品ですからね」

え。と、声を詰まらせたマサキが、値段を気にしてか。上目がちにシュウの顔を窺ってくる。

「高くないか。その、希少品って」

「あなたが思うような値段ではありませんよ」

疑わし気な眼差しを向けてくるマサキに、シュウは微笑んで返した。

科学文明時代に起こった自然破壊で飼料となる牧草が減少してしまった結果、それまでそこかしこで見られたメルー羊はラングラン南部に生息地を限るまでに数を減らしていた。

練金学の時代を迎え、ダメージを受けた自然は回復したが、一度ダメージを受けた生態系が元に戻るのには気の遠くなる歳月が必要だ。シュウも野生のメルー羊を目にしたことはない。

それでも肉の価格が大きく高騰しないのは、メルー羊の生産量回復を目指す畜産農家が増えたからだ。

各家庭に伝わり続けるレシピも彼らの活動を後押しした。伝わるレシピがあるのに、肝心のメルー羊の流通量が少ないままでは伝統文化が廃れてしまう。積極的に畜産技術に練金学を取り入れた彼らの熱意もあって、徐々にではあったが、確実にメルー羊の流通量は増えている。国の試算では、あと二十年ほどでかつての生産量に到達するだろうとのことだ。

「流通量は少ないですが、家庭料理ですからね。量の割には高い程度です」
「本当だろうな……」
「本当ですよ。でなければこのレストランがこんなに繁盛している筈がないでしょう」
それで安心したようだ。シュウが勧めた通りにスープにバケットを浸しながらナヴァランを食べ進めているマサキは、柔らかさではラングラン随一なメルー羊の肉が気に入ったのだろう。見ていて気持ちのよい食べっぷりで食事を進め、シュウが自身の料理を三分の一ほど食べ進める頃には、もう食事を終えてしまっていた。
「こちらも食べてみますか」
シュウが自身の昼食にと注文したのは、ラングランでは食用として一般的なヤムドリだ。テリーヌとチーズ、そしてインゲンと人参を二枚のささみで挟んだ挟み焼き。三分の一ほど切り分けた肉をマサキの皿に分ける。
「そんなには要らねえよ。あんたが食べる分、殆どないじゃないか」
「私は元々、小食なのですよ」
またも疑いの眼差しを向けてくるマサキに、シュウはマサキの皿の上のヤムドリを

三口分ほどに切り分けた。そこからフォークで一切れ取り上げて、マサキの口に運んでやる。

口唇に突き当てられては、食べない訳にもいかないと思ったのだろう。おずおずと口を開いたマサキがヤムドリを咥え込む。油に濡れた口唇が艶やかしい。それを舌で拭ったマサキにナフキンを差し出す。

「どうです。思ったより柔らかいでしょう」

「うん、旨いな。チーズや野菜と溶け合う感じがする。中のこの柔らかいのは何だ？」

テリーヌですよ。答えたシュウは、続けてもうひと切れ、マサキの口元に運んでやる。

「自分で食えるって」

笑いながら口を開いたマサキは、口で云うほどは嫌がっていないようだ。うん、旨い。云いながらヤムドリを噛んでいる。

高級鶏肉にも劣らない柔らかさは、国民に愛された歴史の分だけ品種改良が進んだからだった。

かつては自然に生息するヤムドリが料理に使用されていたらしかったが、ヤムドリに限らず、野生の動物の肉は筋肉が発達していて筋が多く硬い。畜産農家がポピュラーな料理の材料であるヤムドリに目を付けるのは時間の問題だった。

「流石にこれ以上はもういい。あんたも少食だ何だ云わずにちゃんと食べろよ。食事は身体の基本って云うしさ」

三口めのヤムドリを食べ終えたマサキが、続けて自身の皿のヤムドリにナイフを通そうとしたシュウを牽制するように口にする。

シュウは苦笑しつつ、肩を竦めた。マサキが食事をしているのを見ているだけで腹が満たされてしまった――とは、とても口に出来そうにない。シュウはマサキに見守られながら食事を終えた。

思えば朝食も、サプリメントやスープなどで済ませるのが日常なシュウにしては割合しっかりと取った方だ。それでは腹もくちようというもの。食後の飲み物を採りながら、マサキと少しだけ話をしたシュウは、もう一度街のメインストリートに出て、本題であるマサキの日常着を買いに少し大きめの量販店に向かった。

「凄い賑やかな通りだな。屋台があんなに出てる」
三着の日常着と、一着の夜着。そして肌着と下着。結構な量となった荷物を手に街を往けば、大分、人にも慣れたようだ。物珍しそうに辺りに目を向けているマサキに、王都はもっと賑やかですよ。シュウは笑いかけた。
「何か欲しいものはありますか」
「いや、いいよ。迂闊に何か云ったら、あんた全部買いそうだし」
「家でテレビを見るだけの生活も退屈でしょう。暇潰しの道具ぐらいは持っておいていいと思いますが」
時折、ショーウィンドウを覗き込むマサキは、目にするもの全てが珍しく感じられているのだろう。目を輝かせている彼は、普段の大人びた態度からは想像も付かないぐらいに年相応の少年だった。
「雰囲気のある机と椅子だな。物書き用か？」
「アイリッシュ＝スタングレーの作品ですね」
「誰だ、それ？」

「百年ほど昔に活躍したオーダーメイドの木製家具職人ですよ。細かいところまで行き届いた仕事をする割には、作業を終えるのが早く、このぐらいの作品でしたら三日ほどで仕上げてみせたとか」

「へえ、凄いな。あんなに細かい模様を彫り込んで三日か。器用な人だったんだな」

骨董品（アンティーク）を目にしては感心し、大道芸を目にしては興奮する。シュウの袖を引きかねない勢いで、あれもこれもと言葉を吐くマサキに、やはり、刺激を与えるのは大事だとシュウは思わずにいられなかった。

元来、活動的な性質である彼は、好奇心もまた強い性質であるのだ。

自分とふたりで家に閉じ籠っているような生活は、彼の精神状態にはいい影響を与えない……シュウは彼が長く足を止めた模型店で、幾つかの組み立て式模型を購入した。何処かに連れて行ってやりたくとも、シュウは云うに及ばず、マサキもまた顔を知られ過ぎてしまっている。行ける場所に限りがある以上、暇潰しの道具であるに越したことはなかった。

「こんなに。いいのか。俺、あれもこれもあんたに世話になってるのに」

それはシュウのささやかな罪滅ぼしであった。ただ黙って情報局や軍部に通報すればよかっただけの話を、これだけ大きくしてしまった。シュウは自分のエゴでマサキを手元に置いてしまっている事実を、彼の生き生きとした姿を目の当たりにしたことでようやく認めた。借りを返したいなど、おためごかしにも限度がある。

「何処か行きたい所はありますか。折角外に出たのですから、気が済むまで付き合いますよ」

昼時を過ぎたメインストリートは、心なしか人通りが少なくなったようにも感じられる。もう一時間もすればアフタヌーンティーの時刻だ。シュウは呆気なく過ぎていった時間を振り返った。食事に買い物。観光名所があれば連れて行ってやりたくもあったが、生憎人口五万人ほどの街にはそういった目ぼしい場所はない。

「いや、いい。もう充分色々見たよ」

本当に、と尋ねれば、思ったより力強く頷く。それならばと、シュウは街の外に隠してあるグランゾンまで戻ることにした。家に帰り着いたらアフタヌーンティーにしようと、帰りしなに、彼が好みそうな菓子類を幾つか買い求める。

「ところで、ここは何処なんだ」
「バランタイン州の南東部ですよ」
「そうじゃなくて――」
街を背にすること暫く。マサキが空を見上げた。
爽やかな風が吹き抜ける草原に、薄い雲がかかる青空が広がっている。
「ずっと太陽が昇りっぱなしだ。それに地面がせり上がってる。ここは地球とは違う世界なんだろ」
立場や名前をも失ってしまったマサキは、それでもかつて自分が生きていた世界の記憶までは失いきっていないようだ。それもそうだ。と、シュウはしげしげと周囲の景色を眺めているマサキを振り返った。常識の全てをも忘却しきっていたら、彼の混乱はこの程度では済まなかっただろう。
「何か思い出しましたか」
「いいや。でも違う世界だってことぐらいはわかるさ」
念の為に確認してみるも、どうやら記憶を取り戻したのではなさそうだ。シュウは

マサキに歩くよう促した。敢えて触れてこなかったこの世界。そろそろ説明しても受け入れられるぐらいには、マサキも落ち着いたように映る。シュウは歩く道すがらで、彼の疑問に答えることにした。

「ここは地底世界、ラ・ギアス。地球の裏側にある世界ですよ。正確には、座標軸を同一とするだけの位相のずれた世界ですが」

太陽と月が中天に在り、湾曲した大地が緩やかな坂となって続く地底世界と、地上世界の関係性を説明するのは難しい。何故なら、マサキにとっての常識では、地底世界が存在している場所には大量のマグマと資源が眠っている筈だからだ。そこに別の世界があるなど突飛な話にも限度がある。

あるがままに答えたところで、マサキには理解が及ばないだろう。そのシュウの予想は外れていなかったようで、マサキは訝し気な表情でシュウの言葉に耳を傾けている。

「次元が異なると云った方がわかり易いでしょうかね。あなたの知る地球の内側には、大量のマグマと資源が眠っているのでしょう」シュウはマサキが頷くのを待って言葉

を続けた。「私たちが今いる世界は、そこに存在しているけれども、同時にそこには存在していないのですよ」
「何を云っているのか、全然わからねえ」
「理解出来たらアインシュタインを超えられますよ。アインシュタインはわかりますか？」
「何だか難しい理論を考えた学者だよな」
「彼が考えた世界の果てにあるのが私たちの世界ですよ。時間とは伸び縮みするものである。アルバート＝アインシュタインの基本理論ですね。それがわかれば後は早い。時間×速さの式で距離が導き出されるように、時間と空間は密接な関係にあるのです。それ即ち、時間が伸び縮みするのであれば、空間もまた伸び縮みするということ。ここまでは理解出来ますか？」
「ごめん。多分、俺にわかり易いように説明してくれてるんだろうけど、さっぱり……」
「あなたの住まう地上世界と私たちの住まう地底世界は、そのくらいにややこしい関係にあるということですよ。それだけ理解出来ていれば大丈夫です。深く考えなくと

もこの世界では生きていけます」
　シュウは森と座標軸を同一とする次元空間に隠しておいたグランゾンを出現させた。
　マサキの手を引きながら、搭座した機体を上ってゆく。操縦席に身を収めたシュウは、マサキを膝に乗せてシステムを稼働させた。次々と光が灯る計器類に、外の景色を映し出すメインパネル。ラ・ギアスの豊かな自然を正面にしたシュウは、未だ釈然としない表情でいるマサキに語りかけた。
「見えるでしょう、この豊かな自然が。太陽があって、水があり、酸素がある。この地底世界は、生物が生きていくのに充分な資源の揃った世界なのですよ」
「そりゃ、そうだろうけど……」
　俯いたマサキがややあって、ぽつりと呟く。
「カルチャーショック、っていうのはこういうことを云うのかもな」
　動き始めたグランゾン。シュウは操縦に専念している振りをして、それには答えなかった。

※　※　※

特に何事もなく終わった帰途。家に帰り着いたシュウは、早速マサキに買い揃えた衣服を着せるべく、寝室に彼を送り込んだ。

彼が着替えている間にＢＯＴが収集した情報を確認しておこうと書斎に入る。

蓄積されたデータを検めてみるも、昨日のチカの報告からあまり事態は進展していないようだ。軍部はシュテドニアス残軍、情報局は例の噂や戦争で失われたデータの復旧の対応に追われていたし、正魔装機も各地でそれぞれ戦後処理に当たっているようである。

マサキひとりが一日ぐらい行方をくらましたとて、方向音痴という特技を有する彼では日常茶飯事。彼らにとってはそこまで気に掛ける事態ではないのだろう。

それでも流石は、勘の鋭い従妹というべきか。セニアがマサキの消息を調べていた痕跡を発見したシュウは、恐らくは多忙な執務の合間を縫って行われただろうその調査内容に、警戒を強めるべきか、それともいっそこの機会にマサキを彼らの許に返す

べきか逡巡した。

悩ましい。

心配された脳へのダメージは一日が経過したことで、危険はほぼなくなった。問題は失われた記憶だが、ここにいるよりは、王都に帰った方が回復が見込めるだろう。マサキにとって馴染み深い土地であるのは勿論、見知った人間も多い土地だ。見ず知らずの人間ばかりの土地で過ごすよりは、遥かに可能性はある。

マサキ単独であれば、今日と同じく、軽めの変装で王都までの道のりは誤魔化せる。サイバスターの座標はグランゾンにインプット済みだ。後はマサキを引き渡した際に、セニアに直接伝えればいい。小言や恨み言のひとつやふたつは聞かされることになるだろうが、彼女であればシュウの関与を上手く処理してくれる筈だ。

そこまでシュウが考えたところで、書斎の窓をコツコツと叩く音がした。他に尋ねてくる者などなしと思いながらも、ディスプレイから顔を上げてみれば、朝から行方知れずとなっていた青い使い魔が窓の桟にとまっている。

「どうしました、チカ」

「どうしたもこうしたもありませんね。あたくしなしでグランゾンでお出掛けなんて、酷くないですか」

窓を開くなり書斎に飛び込んできた彼が、室内を二周ほど回ったところでシュウの肩に収まる。何しに行かれたんです？　彼の言葉にシュウは肩を竦めた。先に家を出て行ったのは自分の方であるのに、置いて行かれるのは我慢ならなかったようだ。

「マサキの着替えを買いに行ったのですよ」

「いちゃいちゃしているだけかと思ってましたが、その辺はちゃんと考えてたんですね」

「当然でしょう。私の服をいつまでも着せている訳にもいかないですから」

「どうせ二、三日の辛抱でしょうに。そんなに目の毒で？」

シュウは横目でチカを捉えながら、静かに微笑んでみせた。

その二、三日が耐え難かった――とは、口にしない。口にしそうがしまいが、主人の無意識の産物たる使い魔である彼はとうに全てを見通していることだろう。ならば不確定な事実にしておいた方がいい。

シュウは例え自らの使い魔相手でも、本心を明かされるのは嫌なのだ。
「本当に我が主人ながらいやらしい性格をしていると思いますよ」
無言を貫く主人にそうは口にしたものの、彼はそれ以上、話を深く掘り下げる気はないらしく、ラジオを聴いてもいいですか？　と、デスクに飛び移った。
「好きになさい」
自然世界に憧れがあるらしいチカは暇を見付けては辺りを飛び回りに出るが、人飼いのペットのようなものだからか。野生のローシェンには馴染めぬようだ。半日もすればシュウの許に戻ってきて、テレビだラジオだと騒々しい。
「そう云うのであれば、リビングに来ればいいものを」
早速、くちばしで器用にラジオを操作した彼が、ふふふーん。と流れ出した音楽に、上機嫌で喉を鳴らす。
「御冗談を。邪魔者になるだけとわかっていて、誰が行きますか！」
曲に合わせるような言葉の響き。真面目に話をしているのか巫山戯ているのかわかりはしないチカからは、けれども一貫して、シュウとマサキが顔を揃えている場には

居合わせたくないという意思が感じられる。
「マサキもひとりでは退屈でしょうし、話し相手には丁度いいかと思ったのですがね」
「そこはご主人様が頑張るんですね。それとも、話も合わない相手に欲情してるですか？　とんだお笑い種ですこと！　マサキさんは生きたダッチワイフじゃないですよ」
嫌味と皮肉は流石はシュウの使い魔だ。下品さがやや過ぎるも、痛いところを的確に突いてくる。上手い返しが思い浮かばなかったシュウは、確かにと頷いて、リビングへと戻った。
とうに着替えを済ませていたようだ。ソファに座っているマサキが、シュウの姿を見るなり表情を明るくする。
「待たせてしまいましたね」
「今さっき戻ってきたばっかだよ」
テーブルの上にはシュウが置いた模型と菓子の包みが手付かずで残されている。
街であれだけ食い入るように見詰めていた模型だ。さぞや楽しみにしてくれていることだろうと思いながら、作りますか。と、尋ねれば、まだいい。との返事。後の楽

しみに取っておくつもりらしい。大事にするよ。はにかんだ笑みを浮かべたマサキが愛おしい。シュウはテレビを点けてマサキにリモコンを渡し、テーブルの上から菓子の包みを取り上げた。

「丁度いい時間ですし、お茶にしましょう」

キッチンに向かったシュウは、滅多に飲まない茶葉を使用してふたり分の紅茶を用意した。

夕食も近い。胃に重い食べ物を避けた包みの中には、ひと口大の苺タルトと数枚のクッキーが入っている。それを小皿に盛り、紅茶を注いだティーカップとともにリビングに運び込む。香りの違いぐらいはわかるようだ。凄くいい匂いがするな。そう云って、手にしたティーカップから立ち上る香りをを嗅いだマサキが、「飲んでもいいのか、これ」不安そうにシュウを見上げてきた。

「飲めもしないものを出しはしませんよ」

マサキの隣に腰を下ろしたシュウは、昨晩読もうと思ってそのままになっていた本をソファの端から取り上げた。表紙を開きながら紅茶をひと口、口に含む。それで飲

んでもいいと思ったのだろう。緊張した面持ちでカップに口を付けたマサキが、「何かわからないけど、旨いな。知らない味がする」妙に感心した口振りで口にした。

「紅茶なのは確かなんだけど、喉にすっと入ってくるっていうか……滅茶苦茶飲み易いっていうか……」

「いい紅茶というものはそういうものですよ」

「こんな味があるんだな」

テレビを眺めながらゆっくりと紅茶と菓子を味わい始めたマサキに、シュウは本の頁を捲った。

この様子なら暫く読書に耽っても、彼もそこまで居心地を悪くもしまい。自らのコミュニケーション能力に難があるのを覚っているシュウは、あまり多くを語るのが得意ではなかった。興味がある分野や専門分野ともなれば、弁にも熱が入ったものだが、果たしてそういった偏った会話をマサキが好んだものだろうか？　シュウとしては、自宅までとはいかなくとも、仲間と一緒にいる程度にはマサキにリラックスして欲しかった。

だからシュウは、自らマサキに話し掛けることを避けた。
マサキが隣にいる現実は、発作的にシュウの胸を騒がせた。本の中身にしても意識しなければ頭に入ってこない状態だ。それでも、努力の甲斐はあったようだ。ややあって、テレビに集中する様子をみせ始めたマサキに、シュウはちらと画面を窺った。
ラ・ギアスではポピュラーなスポーツ。とはいえ、地上のスポーツと比べれば派手さに欠けるクリケット。反射神経や運動能力に優れたマサキには物足りなく感じるのではないかと思うクリケットを、彼は真剣な面持ちで見詰めている。
「面白いですか、スポーツ番組は」
「色んなスポーツをやってた気がするんだ。身体を動かすのは嫌いじゃない。だからなんだろうな。難しい話は苦手だけれど、スポーツのルールはすっと頭に入ってくる」
成程。シュウは頷いた。
仲間に恵まれているマサキだが、気質的には一匹狼な面が強い。四六時中誰かといるというよりは、必要な時に必要なだけ。ひとりでいることを恐れない彼にとって、記憶を取り戻す縁(よすが)となるものは、仲間や知人といった馴染み深い存在よりも、生まれ

ながらの資質である優れた運動能力の方にこそあるのやも知れない。
「そういうことなら、テレビはあなたの記憶が戻る切欠になり得るかも知れませんね。それに、楽しんで見られるのであれば丁度いい。私はご覧の通りの趣味の人間ですから、あなたに付き合ってやれることといっても剣術の稽古の相手をするぐらいしかありませんし」
「剣術？」
「あなたはこの国でも数少ない剣術の実力者なのですよ」
「へえ。今、ちょっと面白そうだなって思ったんだ。動けば思い出すかな」
剣聖の称号に与っているだけあって、マサキ自身も剣術を面白いものだと感じていたようだ。それならば、付き合ってみるのも吝かではない。記憶のないマサキに情を移しつつあるシュウは、だからといって元のマサキに対する執着心を薄れさせてはいなかった。
むしろ、無邪気なマサキの姿を見るに付け、勝ち気で負けん気の強いマサキへの想いが募ってゆく。

ここにいるのが彼であったら。シュウは願いにも似た想いでいた。けれどもその場合、彼はこんな風にはシュウに心を砕くことはないだろう。覚ってはいても、口の中に広がる苦み。それは決して、今口にした紅茶の味ではない。

「頭部の傷が治ったら少し打ち合ってみましょう。あなたには退屈な思いをさせていることですし」

「いいよ、別に。迷惑をかけているのは俺の方だし」

云うなりシュウの膝の上に寝転んできたマサキが手を伸ばしてくる。しどけない瞳。なあ……と、ねだるように声を発したマサキに、シュウは先ずその髪を梳いた。

――街への出立の際には、立つと云って聞かなかったのに。

強情で頑固なマサキを移動時の振動で倒れては何の為の養生だかわからないと、シュウは半ば強引に膝に乗せた。行きは落ち着かない様子だったが、目新しい光景で気持ちがリラックスしたのか。帰途では緊張している様子はなかった。

――随分と懐いてくれたものだ。

記憶がないが故に寄る辺のないマサキにとって、頼れる相手はシュウしかいないの

だ。雛のようにシュウに纏わり付いてくるマサキ。彼がシュウの温もりを求めてくるのは、彼自身が感じているに違いない心細さと無関係ではないだろう。

もしかすると、彼は他人ばかりの街に出てそれを思い知ったのかも知れなかった。積極的にシュウを求め出したマサキに、弱味に付け込んでいると自覚していながらも拒絶は出来ない。シュウは身を屈めた。マサキの手がシュウの胸の辺りを掴んでくる。

「したいの？」

「したい」

次の瞬間、のそりと身体を起こしたマサキは、それが当然であるかのようにシュウに口付けてきた。

記憶とは人格だ。シュウはマサキの背中に腕を回した。細身の身体をしっかと引き寄せながら、その口唇を貪る。

先天的な気質と後天的な経験。それらはまるで綱引きをするかの如く、人の性格に相補的に影響を及ぼす。気質が伸びることもあれば、新たに獲得した性格が強まることがあるのは、人が善悪だけでは論じられない性質を有しているからである。

シュウは経験に後悔を重ねるたびに、自らを振り替えてきた。幼かった頃の快活だったクリストフはもういない。忌まわしい過去の数々は、それだけシュウ＝シラカワという人間を陰気な性質へと変えてしまった。

だからこそのア・ポステオリ。後なるもの。ラ・ギアス世界で生きた歳月の記憶を失ってしまったマサキは、地上世界での時間へと人格を引き戻されてしまったのだ。この状況を他にどう説明出来たものか。そうでなければ説明が付かないほどに、マサキはシュウにその身を委ねている。

彼の敵である時間が長かったシュウは、サーヴァ＝ヴォルクルスの影響下にあったからとはいえ、マサキの大事なものを幾つも奪ってしまった自覚があった。彼の養父であったゼオルートの命は勿論のこと、彼が安住の地としたラングランの平和、そして数多の人間との思い出が詰まっているだろう王都。シュウは彼の希望と前向きな意欲を幾度も打ち砕いた。それは簡単には彼が自分を赦すことがないだろうという確信めいた思いを抱かせるまでに、終わり泣く続いた戦いの記憶でもあった

さからこそ、マサキに救われたと強く感じているシュウではあったが、では、救っ

た側のマサキはどういった感情をシュウに抱いているのだろう。彼はシュウを救ったのみならず、赦してさえもみせている。並大抵の精神力と胆力と度量で出来る判断ではない。

云いようのない感情に晒されたシュウは、マサキの口唇を激しく奪った。んん、と口唇の合わせ目から洩れ出るマサキの声。きっと、ここはＩＦ（もしも）の世界でもあるのだ。シュウは自らに訪れた奇禍をそう判断するより他なかった。

シュウとマサキが対立する立場にいなければ、こうなっていたかも知れないという未来。無限に続く未来の可能性ひとつに、マサキが記憶を失ってしまったことでシュウは辿り着いてしまった。けれども……時間を遡らずして到達者（アライバル）となったシュウは、果たしてこれが幸福な未来なのだろうかと考えずにいられずに。

――自分を救ってくれたあの輝ける少年は、今はその記憶の中にしか存在しない……。

厳然と目の前に立ちはだかる現実。このマサキはあのマサキではない。それを考えるだに、シュウは云いようのない寂寥感に襲われるのだ。

シュウの舌を感じながら、恍惚とした表情を晒してみせるマサキ。熱に浮かされた

ようにシュウの口唇を貪って、それでも足りないとばかりに舌を絡めてくるマサキ。口付けひとつで息を荒らげ、小さく声を上げるマサキ。欲しいものを自らの掌中に収めた筈のシュウは、どこか乾いている心に虚しさを感じるまでになってしまっていた。

マサキを欲するがあまり、マサキを代替品とするなど愚の骨頂だ。

では後悔しているかと問われれば、それはまた違った問題だった。そう、シュウは記憶のないこのマサキにも情を感じ始めてしまっていた。無邪気に懐いてくる彼が、愛くるしく感じられて仕方のないほどに。

「そんなに記憶を取り戻したいの？」

長い口付けを終えたマサキは、ぴたりと身体をシュウに張り付けてくると、肩に顔を埋めてきた。

「そうじゃない」

「そうではないのなら、何故」

シュウは狡い男なのだ。与えられる答えを幾つも持っていながら、それでもマサキに答えを求めてしまうような。

記憶のないマサキにとって、それはとても答えるのに難しい問いであるだろうに。彼はシュウの温もりで自らの心を慰めているだけなのだ。そう、彼は自分を寄る辺のない身だと思っている。だからこそ、シュウに自分を委ねるしかない。シュウにはわかりきっている自明の理。それでもシュウはマサキに問いかけずにはいられなかった。

見てしまったものがあった。

ロンドベルの艦での二度の逢瀬。一度目のあの時に、シュウは自らの掌中にマサキを追い込みながら、消すに消せない刻印（スティグマ）となった記憶を反芻していた。

自慰に耽っていたマサキの手が弄（まさぐ）っていたその先にあったもの。

彼はただ自分の男性器を扱（しご）いていただけではなかった。自らの身体を――それは乳首であったり、胴回りであったり、或いは首筋であったり、内股であったりと、場所も様々に弄（いじ）りながら、つい口を衝いてしまう喘ぎ声を封じるように自らの衣服を噛んでいた。

恐らく、彼は誰かに自分の身体を弄（もてあそ）ばれたいと、常ならず欲求を抱いていたに違いなかった。乳首を摩る指先にしても、胴回りを撫でる手にしても、昨日今日始めたば

かりの動きをしていない。そのぐらいに彼が自らに施している愛撫はこなれた感があった。

自分が触れ、抱くのではなく、自分に触れられて、そして抱かれたい。彼が胸の内に秘めた欲望は、だからこそ水を向けたシュウに向かった。向かったからこそ、躊躇いがちながらも、ようやく得た快感に身悶えてみせた――……。

シュウは訊きたかったのだ。マサキにその答えを。だから愚かにも記憶のないマサキに尋ねてしまった。自分と性的に触れ合うことを怖れないのは何故なのかと。彼の脳に浮かぶだろう答えが何であるかなど承知の上で。

それに対して、マサキは答えられないようだった。

答えに詰まった彼は、何か云わねばという意識はあるようだ。けれどもどう口にすれば穏便に済むかわからないのだろう。でも、だって、と一向に核心に触れようとしない。それも尤もなこと。シュウは眉を顰めながらも、けれども口元がつい緩みそうになるのを止められなかった。

自らの性癖に触れる問題なのだ。

素直で無邪気な性質であるこのマサキには、そう容易に口に出来た答えでもあるまい。残虐な嗜癖がシュウの心の中で鎌首をもたげる。自分は結局こうだ。どうあってもマサキを追い詰めることしか出来ない。シュウはひっそりと嗤いながら、まともに言葉を発せままのマサキを見守った。

自分だけを見て、自分だけを欲して、そして自分だけに従って欲しい。子どもじみた独占欲だ。いや、占有欲と云うべきか。いずれにせよ、シュウのその欲望は、いずれマサキから自由に羽ばたける翼をもいでしまうことだろう。

地を這う魔装機操者など誰が見たいと望むものか。彼らは魔装機という強大な力を制御(コントロール)出来るからこそ、地上の輝ける星であるのだ。

それでもシュウはそうとしか望めなかった。

――あの心のままに自由に生きる少年は、そうでもしなければ、直ぐに手の届かない世界へと羽ばたいていってしまう。

追えば躱(かわ)され、躱(かわ)されては追うしかなくなる。マサキ＝アンドーという少年は霞のような存在だ。ようやく本性の片鱗を掴んだと思えば、次の瞬間には完膚なきまでに

拒絶をされる。まるでかつての己のようだ。シュウは幾度もマサキの追跡を躱し続けた己を思い出して笑うしかなくなった。因果は巡るとはいったが、これ程までとは。

それでも、シュウは彼を自らの許に留めて置きたかった。そう、何としてでも。そこにはシュウが望み、夢見た幸福が眠っている。

愛する人と生きる。

シュウはマサキがシュウに執着したのとは異なり、最早、彼に打ち勝つことを目標にはしていないのだ。

魔装機神操者マサキ＝アンドー。彼は比類なき立場に見合うだけの精神性を有した世界有数の戦士である。シュウとは生き方が異なる彼に、優れたり勝ろうなどと思うことは愚かなことだ。シュウは何者にも囚われない自由を欲している。

マサキを除いて。

狂おしいまでにこの身を焦がす感情を何と呼ぶべきなのか。シュウはその答えを知らなかった。高知能という才能を暴虐なまでに揮っておきながらの凡性に腹立たしさを感じもするが、そもそもシュウは自らの感情には門外漢である。

愛だ恋だと口で云うのは容易くとも、果たしてそんな薄っぺらい言葉で表していいものか。シュウは悩む。もし、世界に自分とマサキしかいなかったとして、そのマサキが自分に憎しみしかぶつけてこない存在であっても、シュウは人生で後にも先にも存在しなくらいの悦楽に浸れるだろう。

シュウはマサキの全てが欲しいのだ。怒りも憎しみも涙も。更に云うのであれば憎悪でさえも。

だからこそ、彼が自分に向けてくる感情の全てが貴い。それは愛であるというよりは崇拝、或いは信奉に近しい。それだのにシュウは、マサキを素直に崇められなかった。肉欲の鎖で彼を雁字搦めに縛りたい。シュウはマサキを堕としたいのだ。自らの前で全てを曝け出させ、逃れらないくらいに依存させたい――……。

「無理には答えを急ぎませんよ」自らの疚しさに蓋をするべくシュウはマサキに語り掛けた。「あなたが云いたいと思った時に答えてくれればいい」

そして、膝の上に乗ったままのマサキをやんわりと抱き締めた。

テレビに映し出され続けているクリケットの試合。シュウは見ませんかとマサキを

促した。答えられなかったことを悔やんでいるのか。マサキは押し黙ったままでいる。伏せた顔の表情は窺えなかったけれども、莫迦みたいに実直な性格をしている彼のことだ。恐らくは相当に複雑な顔をしているに違いない。

「ほら、マサキ――……」

耳近くで声を掛ければ、ぴくりと肩が震える。

「……怒ってないのか」

「何故？　あなたに答えるのが難しい質問をしてしまったのは私の方ですよ、マサキ。そのぐらいの自覚はあります。昨日今日出会った他人ではないとはいえ、それは私にとってだ。あなたにとっては私は昨日であったばかりの他人。そう簡単に出せる答えではないでしょう」

心にもない台詞を立て続けに吐くことが出来てしまう自分。それを恥ずべきことだとは、シュウは思わない。

卑怯さには自覚があった。

記憶のないマサキとあるマサキ。必要としているマサキがどちらのマサキであるの

か、シュウにはわかっている。にも関わらず、目の前の記憶のないマサキに答えを求めてしまった。身勝手だと思いつつも、シュウの胸が痛むことはない。

手に入れたいのに、届かない。

抱きたいのに、会えない。

気持ちに行き場のないシュウは、自らの所業を無限に正当化させてゆけるのだ。

「模型もあるのですから、そんなに落ち込まないで」

「子どもじゃないぞ」

ぽつりと呟いたマサキに、シュウはふふと声を洩らして笑った。団栗眼の彼の表情は、どれも愛くるしさが先に立ったものだったけれども、中でも膨れっ面の愛くるしさは他に褒め言葉が思い浮かばないぐらいだ。

無邪気さが勝るからこそ、年相応に稚い。

シュウはマサキを膝の上で表に返すと、テレビ画面へと自らもまた視線を向けた。

彼と過ごす二日目の夜を、少しでも穏やかなものとしたい。そのぐらいの良心はシュウにもまだ残されている。テレビを挟んでぽつりぽつりとマサキと話しをしながら、

けれども、シュウはどうすれば元の彼を取り戻せるのかと、脳内で算段を巡らせずにいられなかった。

※　※　※

散在する敵機の残骸。
機体を傾がせるサイバスター。
煤けた大地に砕けた岩。
バルディア州はヌエット海寄りに広がっている平原の只中に、今尚、残る痛々しい戦いの痕跡。こうして起こった戦闘の激しさを伝えてくる場を目前としていると、皮下出血程度の傷でマサキが済んだのは、ある種の奇跡でもあったのだと、戦いに慣れたシュウであっても思わずにいられない。シュウはメインモニターに映し出された近景を、膝に乗せたマサキとともに黙って見詰めていた。
二日目にして、シュウがこの場を訪れたのはマサキの為であった。

有能な従妹は早晩、マサキの足取りを掴むに違いない。それは彼女の能力を重んじているシュウからすれば、確信めいた思いであった。いずれ彼女は論理飛躍演算機（デユカキス）に手を付けるだろう。そうして地域を絞り込んだ上で、マサキの捜索部隊を組むに違いない。

今朝方、確認したＢＯＴからの情報に取り立てて重要な変化は見られなかったが、あの忌々しいぐらいに勘が働く従妹は、シュウがラングラン枢軸の電脳網（ネットワーク）に入り込んでいることぐらい織り込み済みでいることだろう。以前、別件でサフィーネに情報局絡みの調査をさせた時もそうだった。クリティカルな情報をアナクロな手法で管理していたセニアに、手を焼かされたサフィーネは、外部から情報を入手することを諦めて情報局の内部への潜入調査に踏み切った。

それから事情は変わっていないに違いない。シュウの従妹は大胆で奔放な性格とは裏腹に、国難に対しては慎重で繊細な対処を常とする。だからこそ、却って不穏を感じさせるぐらいに目立った動きのない情報局と軍部をシュウは警戒した。裏でどう動いているか把握出来ない従妹は、シュウにとって最大の脅威であったからこそ。

然るに、ここを訪れるのは今しかなかった。

夕べ、寝付けぬ夜を過ごしたシュウは、ソファに作った簡易的な寝床の中でひとつの解を導き出した。対人的な面で執着心を持たぬマサキに記憶を取り戻させる方法。それは彼にとって最大のパートナーであり、ラ・ギアスに彼を縛り付けている存在にこそあるのではないか？

昨日の夕方から付き合い続けたテレビのスポーツ番組が、思ったほど彼の記憶を取り戻させなかったこともあった。色んなスポーツをしていた気がする。それ以上でもそれ以下でもない彼の記憶は、相変わらず曖昧で輪郭を明瞭（はっきり）とはしていないようだ。

長引けば長引いただけ、記憶のないマサキに湧く情。それが恐ろしくも感じられたからこそ、シュウは自らが欲するマサキを取り戻す為に、サイバスターとマサキを会わせる決心を付けた。

けれども、いざこうして始まりの場所に戻ってくれれば、心が乱れたものだ。

自らの利益を追求するがあまり、この場からマサキを連れ去ってしまった。その結果が二日が経過しても記憶の戻らぬマサキだった。彼が自分を縁（よすが）とすればするだけ、

痛みを覚える胸。だのに彼を追い詰めずにいられない。シュウはねじくれた自身の感情が、いつか決定的にこのマサキを傷付けてしまうのではないかという予感を抱かずにいられなかった。

穏やかに過ぎる時間とは裏腹に、波立つ感情。今朝にしてもそうだ。彼と肩を並べて作った朝食。シュウが自身の生活に人間らしさを取り戻しているのは、紛れもなく安藤正樹という揺るぎなき存在のお陰だ。その事実が、酷く重くシュウの胸に圧し掛かってくる。

「あの時は気付かなかったけど、あの人型汎用機（ロボット）は鳥みたいな形をしてるんだな」

ややあって、マサキが口を開いた。

努めてさり気ない風を装ってはいるが、彼にとって風の魔装機神（サイバスター）はやはり特別な位置を占めているようだ。布越しに感じる緊張感。身体を固くして現実と向き合っているマサキは、果たして何かを思い出したのだろうか。尋ねてみたくなるのを堪えながら、シュウは彼の言葉に返事をした。

「風の魔装機神の名に与（あずか）るのに相応しい形状（フォルム）でしょう。あれこそが、あなたが操者を

務める魔装機。平和の旗印たる白亜の大鳳（サイバスター）ですよ」

機体に宿りし風の精霊サイフィスを彷彿とさせる特徴的な形状（フォルム）。雄々しくもしなやかな印象を抱かせる風の魔装機神は、空を舞う大鳳であるようにも映れば、熟達の騎士が剣を構えているようにも映る。

男性的でありながら、女性的。

誰が操者に選ばれたとしてもアンマッチを感じさせることのない柔軟性を備えたデザインの機体は、他の正魔装機にあるような、線を描くような細めパーツが組み合わさった繊細な形状や、骨太なパーツが組み合わさった無骨な形状とは、明らに異なるコンセプトで造り上げられていた。

トップクラスの性能を誇る魔装機神、その頂点を担うに相応しいサイバスターの造形に、見るにつけ美しい――シュウは溜息を吐きたくなるような思いに囚われた。

手に入れたかった自由の象徴は、グランゾンを手に入れた今となっても色褪せることはない。

シュウは膝に乗ったままのマサキの様子を窺った。これだけの存在感だ。さぞや彼

の記憶にいい影響を与えてくれることだろうと期待したものだが、グランゾンのモニター越しにその姿を食い入るように凝視めているマサキの表情は浮かなかった。暫くもすると、何も思い出せないとばかりに、弱々しく頭を振る。

「何も応えてやれないんだ、俺……」

「応える？　何に？」

「呼ばれてる気がするんだよ、サイバスターに」

思わず嘆息しそうになったシュウは、辛うじてその感情を押し殺した。

――嗚呼、やはり風の精霊サイフィスは、マサキを必要としているのだ。

機体を守護する精霊に愛されし魔装機神の操者たち。わけても特に深くその愛情を受けていたのがマサキだった。

自らに近しい魂を求めたサイフィスは、長くサイバスターの操者を決めずにいた。当然だ。ラ・ギアス世界の平和の守り手が生半可な能力や才能の持ち主では話にならない。夢物語に近い理想を追いかけ続けられる根気も必要だ。その末に、ようやく辿り着いた答え。マサキ＝アンドー。求める資質を有していた彼に、だからこそサイフィ

スは惜しみのない恵みを与えた。
幾度となく繰り返された共鳴（ポゼッション）。魂の共振とでも呼ぶべき現象を起こすほどに、風の精霊サイフィスはマサキ＝アンドーという地上人を気に入っている。
対してシュウ＝シラカワという人間は、マサキに何も与えられなかった。天賦の才である知能にしても、それを元としてどれだけ知識を蓄えたとしても、マサキにとっては塵（ちり）にもならない情報だ。世界を守る戦士たる宿命を背負っている彼にとって必要なものは、いざという時に他人を守れる力だけである。そう、わかり易くとも、力こそが正義。それこそがマサキたち正魔装機の操者たちにとっての本懐である。
「あんたが云うには、俺はあの人型汎用機（ロボット）の操縦者なんだよな。俺も何となくそうなんじゃないかって気はしてるんだ。でも、こうして近くに来てみても、何も思い浮かんでこない……」
「そう思えるようになっただけでも充分な進歩ですよ、マサキ。始まりを思い出してみてください。あなたはサイバスターのこともわからなければ、自分のことさえも思い出せなかったでしょう」

「でも、俺は……」その後に続く言葉をシュウは聞けなかった。
「今思い出せないということは、今がその時ではないということ。大丈夫ですよ、マサキ。サイバスターに宿る風の精霊サイフィスの力を侮ってはならない。彼女はあなたが思っている以上に様々な力を揮(ふる)える存在なのですから」
「風の精霊？」
シュウを振り仰いで尋ねてくるマサキに、シュウはそろそろ頃合いかと更に踏み込んだ説明を彼にすることにした。
「私たちが住まうこの地底世界には、神も精霊も実在しているのですよ」
「実在する精霊？　それがサイバスターに宿ってるって？」
「そう、精霊信仰を国教とする神聖ラングラン帝国において、風の精霊サイフィスは絶対的な規範のひとつです。その守護を受けるのが、風の魔装機神とその操者を務めるあなたですよ。わかりましたか、マサキ。あなたは様々なものに守られているのです。だから安心しなさい。あなたの記憶は必ず戻ります」
何の気なしにシュウが吐いた言葉に、マサキは何故か憂いを帯びた表情をしてみせ

た。記憶、か。重苦しく呟いた彼は、シュウから目を逸らすと痛々しい姿を晒しているサイバスターに目を遣った。

どうやら余計な物煩いをさせてしまったようだ。続く沈黙に、シュウは自らの発言を悔いた。

密度の濃い時間に忘れてしまっていたが、マサキが記憶を失ってから未だ二日しか経っていない。知らない世界を目の当たりにするだけでも精神的負担（ストレス）は相当だっただろうに、更にあれもこれもと教え込まれている。

街からの帰り道でカルチャーショックと言葉を吐いたマサキ。もしかすると彼は、押し寄せる情報に押し潰されそうになっているのではないだろうか？　それなのに、シュウは軽々しくもマサキに期待をかける言葉を吐いてしまった。

記憶は必ず戻ると。

今、云っていい言葉ではなかった――シュウは以前のマサキを取り戻したいがあまりに、目の前の少年の気持ちをないものとして扱ってしまったことに気付くも時既に遅し。今更、口にしてしまった言葉が取り消せる筈もない。「……どうしました、マ

サキ？」シュウは気遣いの足りない自分を取り繕うように言葉を継いだ。
「いや、何でもない」マサキは云って、何かを振り切るように首を振った。
「サイバスターの声が聞こえるのであれば、その操縦も可能だと思いますよ。乗ってみますか？」
マサキを愛する風の精霊であれば、そのぐらいの無理は叶えてくれよう。そう思ったシュウが勧めてみるも、マサキは続けて首を横に振るばかりだ。
「応えてやりたい気持ちはあるけど、今はまだ応えられないんだ」
ややあって独り言のように呟いた彼は、そうして再びシュウを振り仰いだ。
「有難う、ここまで連れて来てくれて。今日はもうこれでいい。またここに来る必要が出来たら、あんたに頼むよ。そうしたら今度は……」
その先は良く聞き取れなかった。
けれどもシュウにはマサキの心境がわかったような気がした。途惑いと怖れ。彼の胸を占めているそれらの感情が、サイバスターへとの態度に影響を与えているのは間違いない。

かつて大胆にも召喚直後にジャオームに乗って戦ってみせた少年は、その勇ましさも含めて全ての記憶を失ってしまった。

そういったマサキに、サイバスターに呼ばれているからといって、一足飛びに操縦席に乗り込めというのは無理があった。右も左もわからない世界で、戦闘用の人型汎用機（ロボット）を操縦する。その結果、どういった事態が起こるのか。シュウの胸の傷を戦闘によるものだと解しているマサキは、それを我が身にも起こることとして受け止めたのだろう。

だからこそ、今のマサキにとってはここからサイバスターを臨むだけで精一杯なのだ。それも無理らしからぬこととシュウは思いながらも、こういった機会が次もあるとは限らないことを知っているからこそ、このままでいいものだろうか――と、焦りにも似た気持ちを抱かずにいられなかった。

「本当にそれでいいのですか。その頃にはサイバスターが軍に回収されているかも知れません。サイバスターに使用されている技術は国家機密ですからね。管理は厳重になることでしょう。そうなってしまっては、私にはどうにも出来ません」

「その時はその時だ。のんびり記憶が戻るのを待つよ」

云い切ったマサキの顔は、迷いを吹っ切ったような清々しさに満ちていた。

嗚呼、そうだった。シュウはマサキのある種悟ったような態度に懐かしさを覚えた。泰然自若。あるがままを受け入れる少年は、本来、滅多なことでは慌てなければ、動じもしない。

むしろ、事態を重く捉えていたのはシュウの方だ。

マサキ＝アンドーを取り戻したいという想い。それはシュウが彼を必要としているように、ラングランの民衆もまた彼を必要としていたからでもあった。和平条約調印を目前として尚、シュテドニアス残軍に脅かされる民衆は、彼の復帰を心の底から待ち望んでいるに違いない。

ラングランの内乱を終結に導いた彼は、シュウの人生とともに、地底世界ラ・ギアスの運命をも変えてみせたのだ。

ラングランの至宝、そしてラ・ギアス世界の希望でもある剣聖ランドール。世界をあまねく照らす光である彼が背負った宿命は、その重みに相応しい立場をも彼に与え

た。マサキ＝アンドーという少年の人生は、だからこそ英雄譚となった。酒場で吟遊詩人が謳う彼の物語を、民衆は常に耳にして生活しているのだ。

けれどもそれはシュウの奢りであるのかも知れなかった。

等身大の安藤正樹という少年は、無邪気でお人好しで、人並みに怖れや怯えを感じる人間だ。けれども、いざとなれば誰よりも寛容に世界を受け入れてみせる。久しく見かけなかったマサキの態度に、シュウは彼と自分の差を思い知らされた気持ちになった。

「それなら、戻るとしますか」シュウはグランゾンを稼働させた。「私はあまりここ長居していていい人間ではありませんのでね。ラングランの軍に見付かると厄介です。あなたの気持ちが固まったのであれば、ここを立ち去ることにしましょう」

「そう、なのか……？　なら、あんたは何者なんだ」

二日目にしてこの台詞！　もっと早く聞けても良かっただろう疑問を今になって口にしたマサキに、シュウは流石に嗤いを禁じ得なかった。

「なんだよ、あんた……そんなに笑って。俺、おかしなことを云ったのか」

シュウは暫く嗤い続けた。シュウに口唇を許し、あまつさえ自らねだってみせるマサキ。シュウ＝シラカワという人間の正体に頓着しなかった彼は、真実、自分を助けてくれた人間に感じた直感だけを縁としているのだ。

「私は神に操られてこの国に刃を向けてしまった人間ですよ」

重罪人であるシュウの罪状を知ったマサキはどう感じることだろう。嗤いの収まったシュウはそう思いながら言葉を継ぐも、やはり、と云うべきか。マサキには神や精霊が実在しているという事実が、いまいち上手く呑み込めていないようだ。

「ごめん、あんたの云ってることが良くわからない。サイバスターに精霊が宿ってるってことは、精霊はこのラングランって国を守ろうとしているってことだよな。なのに神はこの国を滅ぼうそうとしたのか？　それは神と精霊が対立しているってことなのか？　そもそも神や精霊が実際に存在しているってことが、俺にはいまいち理解出来ないんだが」

「この世界の神は好戦的なのですよ」シュウは云った。

深くを語るつもりはなかったが、ある程度踏み込まねばマサキに理解をさせるのは

難しい内容だ。マサキの混乱を把握しているシュウは悩まずにいられなかった。二日が経過し、打てる手は全て打った。それでも戻ることのない彼の記憶。そろそろこの世界について本格的に説明してやらなければならない段階にきているのかも知れない。

先史時代、とシュウは口にした。「この世界を支配していたのは人間ではなく、巨人族と呼ばれる生物でした」

「巨人族？　いきなりファンタジーだな。この太陽がなかったらにわかには信じられない話だ」

驚きを隠そうともしないマサキが、それでと続きを促してくる。シュウは話を続けた。

「彼らが何故滅んだのかには諸説ありますが、栄華を極めた種族が滅亡するぐらいの惨事です。生に対する執着心は凄まじく、ひとつの高次元生命体を生み出すに至ります。それが現在、神と呼ばれている存在です」

「巨人族が神となった――のか。霊魂みたいなもんかな。死んで魂だけが残った」

「そうですね。そう捉えてくださって結構ですよ」

シュウはマサキに噛み砕いて説明をした。超越的な存在であった彼らが、かつては信仰を集めていた時代があったこと。けれども暴虐に天罰を下す彼らに人間の心が離れていったこと。やがて、万物に宿る精霊を発見した人間は、精霊へと信仰の対象を変えていったこと。

「自らを怖れなくなった人間を、神は許し難く感じたのかも知れませんね。彼らは隙あらば世界を滅ぼそうとするようになりました。尤も、高次元生命体である彼らのこと。次元で世界が隔てられている以上、容易には地底世界に姿を表せません。だからこそ、彼らは残った信者を利用するようになりました」

「神にしちゃ我儘だなって思うけど、地上の神様もそんなもんか。御伽噺の神様なんて好き勝手してるもんな」

「神にも感情は存在していますからね」

シュウは思ったより飲み込みの早いマサキに安堵した。

数多の神に対する信仰がある日本で生まれ育った彼にとって、神と人間の関係は、シュウが想像しているよりも身近で当たり前のものであるのだろう。すんなりと受け

入れた様子でいるマサキに、これなら問題なく理解をさせられそうだとシュウは更に話を続けた。

「信仰エネルギーというものはある種の奇跡を起こします。思念の飛ばし合いによるチャネリング。それ即ち啓示です。神の言葉を聞いた信者がどう行動するようになったかは語るまでもありません。神は自らの言葉で信者を操るようになりました。そして彼らにこの世界に顕現する為の触媒を獲得させるよう企んだのです」

「神様のお告げか。確かにそれで無茶をする奴は一定数いる」

「察して早くて助かりますよ」シュウはグランゾンを自動操縦に切り替えた。

そして、膝に乗ったままのマサキの身体を引き寄せ、耳に口唇を押し当てる。

ぴくりと震えた肩。マサキの身体が硬くなるのを感じ取りながら、シュウは声のトーンを落として囁きかけた。

「私は彼らに憑代(よりしろ)として扱われたのですよ、マサキ」

現在進行形で続いている因縁。教団とシュウ。彼ら、或いはサーヴァ＝ヴォルクルスの支配は遠い過去の話になったとはいえ、それで受けた傷が癒える訳でもない。シュ

ウにとって、それは忘れ難い屈辱の歴史だ。
決して黎明な心づもりとはいかない胸の内。冷静にこの事実を過去のものとしてシュウが受け止められるようになるのは、教団との決着が付いてからになるだろう。
「その結果、この国に壊滅的なまでのダメージを与えてしまった」
「それって……」
「あなたと私は一緒にいてはならない立場にあるのです」
話を理解出来たようだ。腰に回しているシュウの手に、マサキの手が重なった。
「でも、それはあんたが望んでやったことじゃない」
記憶のないマサキは、記憶がないからこそシュウを信じ切っている。その信用が、重い。反射的に紡がれた彼の言葉に、シュウは目を伏せて静かに首を振った。果たしてそうなのでしょうかね。自分でも驚くほどに重苦しい声。喉から絞り出された言葉に、シュウはまただ――と思わずにいられなかった。
「いずれあなたに話して聞かせて差し上げますよ。私の長い昔話を」
昨日に同じく、またマサキを追い詰めてしまった。無言でシュウの手を握りしめて

いるマサキに、大丈夫ですよ。シュウは努めて穏やかに囁きかけて面を上げた。メインモニターには尽きることのないラングランの雄大な自然が映し出されている。

シュウを捕えていた鎖の全ては、もう取り払われた後だ。

思い煩う必要のなくなった過去にいつまでもしがみ付くほど、シュウは愚かではない。ただ、ほんの少し、記憶の戻らないマサキに苛立ちを感じてしまっただけなのだ。そう、何もかもを忘れてしまったマサキ。今の彼にはシュウを殺した記憶も、シュウを引き戻した記憶も残されていない。

「……本当に、話してくれるんだろうな」

青白さが浮き立つ手の甲。色が失われるほどにシュウの手を握り締めていたマサキが、念を押すように言葉を発する。勿論ですよと頷いたシュウは、けれどもきっと、その話をする機会には恵まれまい――そう思いながらマサキから手を離す。

そもそも、シュウが壊した世界などほんの一握り。自らの因縁に関わる場所でしかないのだ。その場所に纏わる思い出の数々をマサキに語って聞かせてどうしようというのか。

シュウはグランゾンの移動スピードを速めた。
色鮮やかな景色が、線を描くようにして過ぎ去ってゆく。
街に寄るかと尋ねてみても首を振るだけなマサキに、シュウは帰途に就くこととした。それ以上言葉を吐くことのくなったマサキを膝に乗せたまま、ヌエット海に入る。ラングラン軍の警戒が薄いこの地域は、シュテドニアス残軍が姿を現すことも多かったが、幸い彼らには巡り合うことなく家に帰り着く。
書斎の窓はチカが自由に出入り出来るように細く開いてある。
玄関前に立ったシュウの頭上から響いてくるローシェンにしては下手な鳴き声。頭上を見上げてみれば、家の隣に立っている巨木の枝にチカの姿がある。彼はまた、シュウが自分を連れて行かなかったことを恨めしく感じているのか。ぷいと顔を背けると空へと飛び立ってゆく。
シュウはその姿を追い掛けることなく、マサキを連れて家に入った。
家に上がり込んだマサキが、疲れ切った様子でリビングのソファに身を投げ出す。昼食をどうするか尋ねてみれば、いらないとの返事。程なくして眠りに落ちてしまっ

たマサキに、シュウは何をすべきか悩みながらも、他にすべきこともない。ベッドの端に腰を下ろし、一向に先に進まない読書の続きをすべく本の表紙を開く。

流石にマサキが眠っている今ならば集中出来るかと思いきや、心が乱れているからだろうか。やはり頭に内容が入ってこない。暇を持て余したシュウは隣で眠るマサキに目を落とした。すうすうと軽い寝息を立てているマサキはそう簡単には起きそうにない。

滑らかに艶めく髪に指を通す。反応のないマサキにシュウはひっそりと溜息を吐いた。

――こんなに疲れ果てるほどに、マサキは今の生活に負担を感じている……

いい加減、利己主義的な考えでマサキを手元に置いておくのは止めるべきなのだろう。シュウは微かに胸が痛むのを感じた。けれども、この状態のマサキをひとりで野へ放っていい筈もない。セニアに任せておけば子細問題なしとはいえ、情勢は不安定なままなのだ。

戦争に意欲的だったシュテドニアスが、果たしてラセツという指導者を失った程度

で引いたものか。バゴニアだってそうだ。ラングランと長く紛争を繰り返してきた歴史のあるあの国にとって、停戦は一時的な休戦にしか過ぎないことだろう。ゼツという推進力を失った程度で戦意を失うとは思えない。

シュウの得ている情報が確かであるならば、諸外国の動きも疑わしい。軍拡に踏み切った国もあれば、軍備増強に舵を切った国もある。新たに不可侵条約を結び、来る戦いに備えている国も増えた。

神聖ラングラン帝国が生み出した魔装機神という新たな力は、世界に新たな争いの火種を生み出してしまったのだ。

そういった中で記憶を失ったマサキの人権がどこまで守られたものか。セニアがどれだけ強権を発動してマサキを保護したとしても、彼が比類なき力を有しているという事実は揺らがない。王政の名残りに反発する議会の突き上げが起こるのは必死だ。

それだったら、いっそここにマサキを留めておいた方が、世間の騒がしさと無縁でいられるだけ安全ではなかろうか。

きっと、ラングランの戦乱を収めてみせた少年は、その戦いの日々に疲れてしまっ

たのだ。簡単には戻らないマサキの記憶に、もしかするとこれは天の采配であるのかも知れない。シュウはそう思いもした。

心と身体を再起動（リセット）して、また戦いの場へと戻れ。マサキを愛する気紛れな風の精霊は、マサキの為であるのならば、そのぐらいのことは造作なくやりそうである。

シュウはマサキから手を離した。捲れた前髪から覗く穏やかな表情。眠りが彼の精神を休ませていることは明らかだ。それならば――シュウは本を片手にソファから腰を上げた。この機会に少し彼と離れよう。なるべく物音を立てないようにして書斎に向かったシュウは、そこで自身もようやく、久しぶりの精神の安息を得た。

※　※　※

暮れなずむ夕日の光が窓から差し込む書斎。赤く染まった壁もそのままにシュウが本を読み耽っていると、夕方近くになって起きてきたようだ。きいと音を立てて扉が細く開かれた。

隙間から顔を覗かせたマサキに読書の手を止める。起きましたか。尋ねてみれば、マサキはどこか気恥ずかしそうに言葉を継いだ。

「ああ、うん。その、腹が減って……」

目覚めた理由が実にマサキらしい。シュウは零れ出る笑みを抑えきれなかった。

「もうそんな時間ですか。一日が過ぎるのは早い」

キッチンに入り、冷蔵庫を開く。買い足した食料で溢れ返っている棚を物色しながら、後を付いてきたマサキに夕食の希望を尋ねる。

「我儘、云ってもいいか」

材料を確認しているのだろう。シュウの背後から冷蔵庫を覗き込んでいるマサキが希望を口にする。チーズオムレツとハンバーグ。手の込んだ料理はあまり得意とはしていないシュウではあったが、他でもないマサキ立っての希望だ。必要な材料を取り出してキッチンカウンターに立つ。

「好きだったような気がするんだよ、ハンバーグ。だからかな。なんか無性に食べたくなって」

「チーズオムレツは？」
「昔、何処かのレストランで食ったような気がするんだ。それが滅茶苦茶旨くてさ……」
今回も手伝いをするつもりなようだ。至極当然と隣に立ってきたマサキに、シュウはオムレツ用の卵を手渡した。
今朝の朝食では目玉焼きを作らせている。それで卵を割る要領を掴んだらしい。手際よくボウルに卵を割り入れてゆくマサキに手伝いはもう必要なさそうだ。シュウは玉葱を取り上げた。
「ハンバーグの玉葱は荒い方と細かい方、どちらが好みですか」
「荒い方かな」
オムレツ用の卵を溶かせている間に玉葱を刻み、続けてハンバーグの種を捏ねさせる。頭が覚えているのか、身体が覚えているのか定かではないが、特に何も云わずともきちんと挽肉を捏ねているマサキに、オムレツを焼き上げたシュウはレタスを渡した。
「何処かのレストランの場所は思い出せませんか？」

「それがさっぱりなんだよな。誰と一緒だったかも思い出せないんだ。ただ、綺麗にセッティングされたテーブルの上に、キャベツの千切りとポテトサラダが添えられたチーズオムレツがあってさ……」

彼なりに思い出そうとはしているようだ。レタスを千切ていた手が止まり、悩ましい気な瞳が宙を泳ぐ。

「駄目だな。思い出せない」

「急ぐ必要はありませんよ。思い出す時がくれば自然に記憶は戻ります」

「何だか経験したことがあるみたいに云うよな、あんた」

「そうですね」

マサキの言葉に思い出される記憶。

シュウはフライパンに形を整えたハンバーグを置いた。ぱちぱちと油が弾ける音が響く。

ぽっと瞬間的に蘇ってくる凄惨な記憶の数々に、必死に表情を保ち続けた蘇生後の日々。そうでなくともシュウの些細な変化に敏感だったルオゾールやサフィーネは、

記憶を失ったシュウに更に警戒心を強めていた。
彼らはシュウが教団にどういった経緯で入ることになったのかを知っていた。知っていたからこそ、シュウの自我が取り戻されることを怖れていた。
彼らを謀るのにシュウがどれだけ苦心をしたことか。
演技に演技を重ねるのは、長く王宮にいたシュウにとっては容易いことであったが、何もないところから突然に自分の知らない記憶が湧き上がってくるのは初めての経験だった。特に胸に残った傷痕の由来に辿り着いた時には、背筋が凍るような思いをしたものだ。
きっと、マサキも同じような思いをすることになる。
戻るのが一瞬な割には、長く尾を引く記憶。絶望と自我の狭間でもがき苦しみ、それでも受け入れて生きていかねばならないのだと腹を括ったシュウは、無邪気なマサキの芯の強さを知っていても、胸を重くせずにいられなかった。
「あなたの記憶は、あなたにとってどういった意味を持つものとなるのでしょうね」
だからこそ口を衝いて出た言葉。シュウはフライパンに蓋をして、いつの間にかと

んでもない量のレタスを千切っていたマサキを振り返った。
「何だよ、それ。思い出さない方がいいみたいな云い方をするな」
「あなたはこのラングランを救った英雄ですからね。それは、それだけ過酷な戦いに身を投じ続けたということでもあるのですよ。ですから、決して楽しい思い出ばかりではないでしょう。むしろ嫌な思い出の方が多いかも知れません」
「でも、思い出さなきゃサイバスターには乗れない」
僅かな時間の邂逅で、白亜の機神は記憶のないマサキに何を残したのだろう。決然と云い切った横顔に、彼のパートナーはサイバスターしかいないのだとシュウは思い知った。
「その通りですよ」シュウはボウルに山となったレタスを取り上げた。「流石にこれを食べきれる気はしないですよ、マサキ」
「ちょっと手が滑ったんだ」
「半分は明日の朝に回すことにしましょう」
空いたボウルに分けたレタスを冷蔵庫に仕舞いながらも騒ぐ胸。醜い嫉妬心が顔を

覗かせている。

シュウにとってマサキが唯一無二の存在であるように、マサキにとっての唯一でありたい。利己的な己の利己的な願いが刻み込まれた胸の内。そうなってしまったら、それはシュウの欲しているマサキ＝アンドーではなくなってしまうというのに。

シュウは愚か者なのだ。

わかっていても望まずにいられない。

カウンターに戻ったシュウは蒸したハンバーグをフライパンから取り出して、既にセッティングを終えているテーブルの皿に盛り付けた。時間はかかったものの、それなりに形になった夕食の席。それぞれ席に着いて、この二日間の出来事をふたりで振り返る。

主な話題は、街の賑やかさについてだった。

生活感を感じさせる雑多な町並みに、道往く人々の華やかな衣装。シュウにとってはありふれた街の景色は、マサキにとっては異なる文化の表れだった。カルチャーショック、と帰り道に言葉を吐いたマサキは、それでもその色鮮やかな世界が気に入ったよ

うだ。

「ああいう賑やかな所はいいな。ただ居るだけでも気持ちが落ち着く」

それはシュウと居ると落ち着かないと告白しているも同義だった。

その理由が何処にあるのか、わからないシュウではなかった。マサキは不安なのだ。救いの手を差し伸べてくれたからという理由でここに身を寄せることを決めたものの、自分の素性どころか相手の素性も知れないときては、不安にならない方がおかしいぐらいだ。

今日の帰りがけでその片鱗を知ったマサキは、けれどもそれをシュウの所為ではないと言下に否定してみせた。それは彼がシュウ＝シラカワという人間の本領を知らないからでもあるのだろう。邪神の神殿で顔を合わせたマサキは、確かにシュウを許してみせたけれども、かといって流された血までもなかったことにはしていない。

どちらかといえば、彼はシュウ＝シラカワという扱い難い第三勢力に匙を投げてしまったといった方が正しい。既に敵対しなくなった勢力――しかもそれなりの戦力を有する一団。潰し合いをする道理もなくなった以上、昔のようにシュウに構ってい

るような暇はマサキにはなくなった。
風の魔装機神が操者、マサキ＝アンドー。またの名を剣聖ランドール。
彼が目を向けている世界は、シュウが囚われている世界よりも遥かに広くなった。神聖ラングラン帝国から、バゴニアとシュテドニアスを含む三国に活動の幅を広げた正魔装機。彼らはやがてラ・ギアス全土へと飛び出して行くことなるだろう。
それを知っていたら、マサキはシュウに身を委ねただろうか？
答えは否だとシュウは思う。
シュウがマサキと同じ立場に立たされていたら、そもそも自分を他人に委ねたりはしなかった。自分のことは自分で処理しきってみせる。チカにも明かさなかった本心を、ヴォルクルスとの決戦まで隠しきったシュウは、他人が根本的には信用ならない生き物であることを悟り切ってしまっていた。
それがシュウとマサキの差でもあるのだ。時に他人の助力を得ることを厭わないマサキに、どうあっても自分独りで事を解決したいシュウ。そう考えると、最後の最後まで人を信じることを失わなかったマサキは、記憶を失っていたとしてもやはりマサ

キなのだろう。

「マサキ、あなたは――」

それ以上の言葉を吐げなかった。私といると疲れるのではありませんか。尋ねればマサキは困惑するに違いない。

きょとんとした表情で自分を見詰めているマサキに、いえ。とシュウは頭を振った。「滅多に作らない料理なのでどうなることかと思いましたが、それなりに形になったようで良かったですよ」

言外に、とはいえ、不安を感じている胸中を惜しげもなく晒してみせたマサキは、自らが暴露してしまった本音には気付いていないのだろうか。シュウの言葉を真に受けたようだ。料理の乗った皿に視線を落とすと、「記憶が無くても作れるもんだな」自らのリクエストした食事の出来栄えに満足した様子をみせた。

このぐらいのささやかな幸福でいい筈なのだ。

自らを縁とする少年とふたりでありきたりな日常を過ごしてゆく。

だのに晴れぬ心は、シュウの気持ちが元にマサキにあるからこそ。彼を取り戻した

い。シュウは帰宅後の疲弊しきった様子はどこにやら。陽気に言葉を紡ぐマサキの話に付き合いながらも、日増しに高まる寂しさに胸を削られてゆく想いでいた。

「旨かったよ、本当に。無理を聞いてくれて有難う」

思い出の味を口に出来たことで、大分気持ちがリラックスしたようだ。食事を終えたマサキが、無邪気に顔を綻ばせてシュウへの礼を口にする。微笑ましく感じながらも、あまり長居をさせてはいけない。シュウはマサキをバスルームへと追い立てた。

どうかするとあれもこれもと手伝いかねない彼は、その窮屈な環境にも疲れを感じているのではないだろうか。

だから、今日の午後を眠りに費やしてしまった……。

かつてない疲れ具合でいたマサキを、今日は早く休ませてやらねば。シュウはマサキが風呂を済ませている間に片付けと皿洗いを済ませ、今日もソファを寝所とすべく、リビングに必要な荷物を運び込んだ。

大量の書物に、小型の携帯型端末。眠れぬかも知れぬ夜に備えてソファ周りを整える。

そしてようやく先に進んだ読書の続きに手を付ける。程なくして、バスルームから出てきたマサキがリビングに姿を現した。夜着を買い与えたお陰で、初日よりは見られる格好となったマサキ。昨晩、比較的穏やかな眠りに就けたシュウは、これでもうマサキの格好で心を乱されることはないだろうと安心しきっていた。

「いつも先に風呂をもらって悪いな」

「気にしなくともいいのですよ。あなたはこの家には珍しい客人です。そのぐらいは当然の権利だと思ってもらわねば」

入れ違いにバスルームへと向かったシュウは、手早くシャワーを済ませた。髪と身体を洗い、僅かにバスに浸かって脱衣所に出る。鏡に映る胸の傷。見慣れた傷痕は、けれども今日に限ってはまるで焼き鏝(ごて)の後のように映った。

放っておけばマサキが心細い思いをするのではないかという焦りもあって、早めに済ませたバスタイム。既にシュウの生活は、マサキを中心として回るようになっているようだ。その事実に苦笑を浮かべつつリビングへと戻ってみれば、まだ宵の口だからだろう。マサキはソファの上で、シュウが用意したブランケットに包(くる)まってテレビ

を見ていた。

食事とシャワーを済ませてひと心地付いたからか。どこかしどけなく映る横顔。薄く開いた口唇が、時折、テレビに向かって無意識に言葉を吐いている。

記憶がないが故に、シャワーが中心のバスタイムに慣れないのかも知れない。しっとりと湿った髪の毛が、額や頬に張り付いている。手入れは欠かしていなかったが、後頭部のガーゼを変えてやる必要がありそうだ。シュウは救急キットを取りに一度地下に下りた。そのついでに書斎に寄り、ＢＯＴが入手した情報のチェックを済ませる。

チカは未だ戻って来ていなかった。

その代わり、ＢＯＴが収集したログには重大な変化が見られたホログラフィックディスプレイに浮かび上がる大量の文字列。どうやらセニアは本格的にマサキの捜索に乗り出す気になったらしい。情報局のログにはマサキの足取りを追っている様子が記録されていた。

そこまで時間を割ける余裕がないからか。現在の探索範囲はラングラン州に限られているようだが、いずれは周辺地域にも範囲を広げることだろう。今日の内にサイバ

スターにマサキを会わせたのは正しい判断だったようだ。シュウは安堵に胸を撫で下ろしながらリビングに戻り、マサキの隣に腰を下ろした。

「そういや、あんたの使い魔。あれから姿を見てないけど、放っておいていいものなのか」

「あれはあれで気を遣っているつもりなのですよ。ここで休むつもりなら、とうに戻って来ているでしょう」

マサキの後頭部に処置を施してやりながら、シュウは拗ねて姿を消してしまったチカの行方を案じた。

チカに限ったことであったかも知れなかったが、主人の無意識の産物である使い魔は、どうやら主人の意識を読み取ることが可能であるらしい。彼は決して明瞭(はっき)りとは口にしなかったが、勝手にシュウの感情が流れ込んでくることもあるのだとか。だからだろう。チカはシュウのマサキに対する度を越した執着心を覚っているようだ。

でなければ、どうしてああも露骨にシュウを咎める言葉を吐き続けられたものか。

恐らく、チカはシュウがマサキと性的な関係を持ったことにも気付いているのだ。

気付いていて、敢えて直接的に触れずに済ませる言葉選びをしてみせた。チカは口煩くも躾の至らない使い魔ではあるが、相手によってはきちんと発言を慎んでみせる辺り、主人たるシュウの性質を把握している。

使い魔を生かすも殺すも主人の意思ひとつだ。

生まれたばかりのチカは、兄弟とも呼べる存在を失った。喧しさに耐えきれずにシュウが消した命だ。その瞬間に、彼は自分の命が容易く奪われるものであることを思い知ったに違いなかった。

彼が意地汚くも生に執着するようになったのは、それからだ。

迂闊な言葉遣いが自分の命を縮めることをわかっているチカは、きっと今宵も軒下で身体を休めることだろう。そう、シュウがマサキをどう扱うのか。自身の目で確認する為に。

下衆で下世話な使い魔は、消滅を怖れながらも、そのぐらいには神経が図太い。

「おかしな使い魔なんだな。だって、あんた云ってたよな。使い魔は魔装機の制御に必要だって。その割にはあの使い魔はあんたの人型汎用機に一緒に乗り込むこともし

ない」

「私の機体は魔装機ではありませんからね。練金学でコーティングはしてありますが、元々は地上の技術を用いて作られた機体です。勿論、いれば副制御（サブ・コントロール）を任せることもありますが、最初からそういった設計思想で作られている訳ではないのですよ。いなくとも済む、その程度の機体です。私のグランゾンは」

「あんた、地上に居たのか」

ええ、と頷いたものの、詳しく聞かれたい話でもない。破壊神サーヴァ＝ヴォルクルスに魂を乗っ取られて暴虐の限りを尽くしたシュウは、地上世界を滅ぼそうとしたところで一度の死を迎えている。死という救済を与えたのは他ならぬマサキだ。シュウはその事実に感謝を覚えてはいるが、マサキがどう考えているかまではわからない。

記憶のあるマサキならまだしも、そうでないマサキが背負うには重い過去。シュウはそれ以上マサキに追及させぬよう「そろそろ休みませんか。午後も寝て過ごしていますし、疲れているのでしょう」と、話を逸らした。

笑顔は鎧であるのだ。

露骨な話題逸らしをも正当化させる、無言の圧力。それは王宮時代に培ったシュウの護身術のひとつだった。

それなりの権力を有する元老院に貴族、そして側仕えの侍従たちといった王族に連なる者たち。彼らは主人たる王族に対して余計な干渉を繰り返してきた。緋のカーテンの裏側で繰り広げられる陰謀劇。権謀術数の限りを尽くし、自らに敵対する者の足を引っ張ることに余念がなかった彼らの醜さを、第三位の王位継承権を有していたシュウは数限りなく目にしてきた。

立場の割に、シュウがそうした陰謀に巻き込まれることが少なく済んだのは、この笑顔のお陰でもあっただろう。

物云わぬ無言の圧力。それは効果を十全に発揮した。そうか、と話を終わらせたマサキが、ころんとブランケットに包まったまま、シュウに凭れかかってくる。

「あれだけ寝たからかな。まだ眠くないんだ」

そう、と頷いたシュウは救急キットをソファの脇に置いた。

「それなら模型を組み立ててはいかがです」

「あんたがいるのにひとりで模型を組み立てるのもな……」

どうやらマサキはシュウの神経を休ませてくれる気はないらしい。

手当の際に目にしてしまった彼のうなじが目に焼き付いている。雫を垂らす伸びっ放しの後ろ髪。しなやかなその茂みを掻き分けて、見た目よりも繊細な首筋に吸い付きたい。浅い襟足から覗く鎖骨。思ったよりも色の白い肌に舌を這わせたい。それは見てはならぬものを目にした後だったからこその葛藤だった。

目を閉じれば未だに鮮やかに思い出せるマサキの欲望に溺れた表情の数々。その記憶がシュウを惑わせる。

二度と訪れることのない好機。マサキと一つ屋根の下で過ごす。誘惑に限りはない。にも拘わらず、その対象たるマサキには記憶が無いのだ。

シュウの愛撫によがってみせた記憶も、シュウの男性自身を受け入れて喘いでみせた記憶も、今の彼の脳内からは綺麗さっぱり消えてなくなってしまっている。そう、自ら身体を開いてシュウを導いた記憶さえも……

口惜しさに滅茶苦茶にしたくなる。

他人の知らない姿を晒してみせて、それでも尚シュウを躱そうと藻掻き続けたマサキ。そのマサキを自分だけのものとしておきたい。自分だけを見て、自分だけを感じさせて、ずうっと。ただ欲望の赴くまま、快感に溺れ続けさせたい。

滾る欲望をどう処理すればいいかわからないシュウは、それでもその行き場のない感情を押さえ込むことでしか、自分を保つことが出来なかった。だからマサキを早く寝室に追いやりたかった。だというのに、マサキはマサキでそういったシュウの感情に思いを馳せることはないのだ。

「なら、昨日のように一緒にテレビを見ますか」

「それもいいけど……」

シュウはマサキの頬にかかったままの髪を払った。どこか拗ねたようなマサキの顔。雛のようにシュウに纏わり付いてくる印象もあってか、シュウの良く知るマサキと比べると更に稚くも感じられる。

彼の身体はこんなにも小さかっただろうか？

確かに彼の肢体は、目にしている姿よりは細かった。だぶついたジャケットを好ん

で着用しているからだろう。彼の肩幅の狭さや胸板の薄さ、腰の細さを目の辺りにしたシュウは、少なからず驚いたものだ。

これが二つの世界を股にかけて活躍したマサキ＝アンドーであるのだ。

細身の身体で懸命に世界の秩序を支え続けた少年。シュウはその強靭な精神に感心した。だからこそ強く印象に残った彼の痴態。しなやかに身体を揺らして快楽に溺れていった彼は、けれどもここまで小ささを感じさせるような雰囲気ではなかった筈だ。

子どものように無邪気なマサキ。シュウのそういった認識が、彼の体格を錯誤させてしまっているのだろうか。

そうシュウが思った刹那、膨れた頬の空気を抜いたマサキが、背を伸ばしてシュウの口唇に口付けてくる。

当然のように深く会わされる口唇。濡れた舌が忍んできた口腔内に、シュウは眩暈を覚えた。欲しいものを覚ったかのように動いてみせるマサキ。果たして彼は何を思って、再三シュウに口付けてくるのか。

昨晩、聞くことのなかった答えが、その全てであるのだろう。

――それならそれで遣り様もあるというもの。
自分ばかりが理性を試されている状態に疲れてしまっていたシュウは、蓋をしていた欲望を僅かに解放した。
髪に、頬に。そして首筋に手を這わせながら、止め処なくマサキの口唇を奪う。こんな表情も出来るのだと思うような、色気に溢れた顔。されるがままでいる彼の息が上がるまでにそうは時間はかからない。
熱い呼気が頬を撫でる。
マサキの口唇を味わい続けるシュウに、マサキはマサキで限界を迎えたようだ。肩で息を吐き始めた彼にシュウが口唇を離せば、濡れそぼる瞳がシュウを見上げてくる。
「……それだけ、なのか」
「もっとして欲しいの、マサキ。もう充分過ぎるぐらいにしたでしょうに」
「そうじゃなくて、その、続き……」
その台詞でマサキの云わんとすることを察したシュウは、自分でも驚くほどに狼狽えた。

時間をかけて云わせるつもりだった自分を求める台詞。かつてのマサキに求めていた展開を、記憶のないマサキ相手に迎えてしまった。

早鐘を打ち鳴らす心臓は、取り返しの付かない失態に焦っているようでもあった。

滅多なことでは心が動くことのない自分が、こんなわかりきった展開を前にして狼狽えている。シュウは自分が正常な状態にないことを、マサキにだけは悟られたくないと思った。瞬間、微かに脳が醒める。努めて冷静さを保ちながら、疚しさを胸の奥に封じ込めたシュウは、自分を凝っと見上げているマサキの頬を撫でた。

「記憶の無いあなたに無茶を働く訳には行かないでしょう、マサキ。そうでなくとも、あなたにはあなたが思っている以上の負担がかかっている状態です。これぐらいの刺激で丁度いい」

くっと結ばれた口唇が、マサキの感情を表している。睨め付けるような眼差し。一瞬にして怒りを覚えたかのような表情に塗り替わった彼の顔が、真っ直ぐにシュウに向けられている。

「おかしくなりそうなんだよ。あんたとキスしてからずっと！」マサキの手がシュウ

の胸元を掴んだ。「あんたはどんな風に俺に触れるんだろう。どんな風に俺を抱くんだろう。そんなことばかり考えてる！」

声を荒らげてそう吐き出したマサキは、その勢いのまま。自らの手の甲に額を重ねるようにして、シュウの胸元に頭を埋めてくる。

「あんたは俺を知ってるって云うけどさ、俺にとっては、こないだ会ったばかりの他人なんだ。それなのに、こんなことばかり考えてる。なあ、あんた。俺、本当にどうにかなりそうなんだ。あんたは俺の何なんだ。どうして俺はこんなに苦しいんだ。教えてくれよ！」

どうにかなってしまいそうなのは、自分の方だ――シュウは叫びだしたくなるのを抑えるのに必死だった。

記憶の喪失とはいえ、マサキのそれは打撲の衝撃による一時的な健忘だ。脳の器質的な問題ではない以上、元あった記憶はマサキの中に残されている。それなのに――。否、それだからこそ、マサキの言葉はシュウに衝撃を与えた。

記憶のないマサキの中には、シュウとともに過ごした時間の記憶が確かにあるのだ。

マサキが変調をきたしてしまった原因は、その記憶にこそあった。それは二度の逢瀬に他ならなかった。

性的な関係を持ってしまった始まりの記憶と、決定的にふたりの関係を変えてしまった性交渉の記憶。マサキはその記憶を認識出来ないけれども、覚えてはいるのだ。だからこそ意識がそこに向かい、そしてだからこそ考えずにいられない。

彼はただ、頭部に受けた衝撃で記憶を上手く引き出せなくなっただけなのだ。

その上で、自分を求める言葉を吐いた！

今直ぐにでも、その全てを奪い去りたい。そうして泣くほどに責め立てたい。制御困難な衝動に突き動かされるがまま、シュウはマサキを抱き締めていた。聞きたかった言葉を耳にして、どうして理性を保てたものか。彼にはシュウとの記憶が残っている！

髪に、額に、こめかみに、頬に、口唇に、所構わずと口付ける。彼が欲しい。呪縛となった言葉を胸の内で繰り返す。彼が欲しい。洗い立ての髪に顔を埋め、その匂いを嗅ぎながら、シュウは見目よりも華奢に感じるマサキの身体を膝の上に乗せた。

彼が――欲しい。

湿度を含んだ滑らかな髪の感触。抱き心地のいい柔らかな肌の感触。シュウが欲したマサキの身体が、紛れもなく腕の中に在る。これから自分はこの身体を嫌というほど鳴かせるのだ。シュウの胸は幸福で張り裂けそうだった。

「あの、その……俺……」

性急にことを進めたくなるのを抑えながら、シュウはマサキの夜着の前襟の合わせ目をゆっくりと解いていった。ぴくり、とマサキの身体が震える。けれども、それだけだった。素肌が露わになってもマサキは抵抗することなく、シュウに身を任せたままでいる。

「怖くなりましたか、マサキ」

「怖くない……でも……あんたはそれでいいのか」

「それで良くなければ、そもそもあなたに触れもしていませんよ。安心なさい、マサキ。無理はしませんよ」

シュウはなるべくマサキを丁寧に扱った。

もしマサキが記憶を取り戻したとして、この記憶がその中に残り続けるとしたら、自らの欲望を認めたがらない少年のことだ。彼はきっと過剰にシュウに反抗してみせるようになるだろう。わかっていても、シュウは自らの欲望を果たすことを止められそうになかった。

賽は既に投げられたのだ。それも他ならぬマサキの手によって。

「ほら、マサキ」

シュウはマサキの夜着をはだけさせると、耳にかかっている髪を掻き上げて、その耳へと舌を這わせた。

びく、とマサキの身体が大きく揺れる。

耳孔の奥へと舌を差し入れ、時に息を吹きかけながら、その耳をあますところなく舐(ねぶ)ってゆく。過去に自ら慣らした身体でもあるからだろう。耳介、耳朶、耳孔……どこに舌を這わせても、マサキは面白いように反応した。

それが耳に限った話ではないことをシュウは知っている。

うなじに首筋、鎖骨に乳首、或いは男性器といったわかり易い性感帯だけではなく、

二の腕や肘、前腕に至るまで、マサキは感じてしまうようだった。
腰回りへの刺激にも弱ければ、足の付け根への刺激にも弱い。それだけではなく、腋窩(えきか)だろうが、肘窩(ちゅうか)だろうが、身悶えてよがってみせる。二度の逢瀬でシュウがマサキの肌という肌に愛撫を施したのは、彼がどこに触れても感じてみせたからだった。
その感度の良さは、手の甲への愛撫ですらよがってみせたほどだ。
マサキ＝アンドー、或いは安藤正樹という少年は、それだけ他人に与えられる刺激に飢えていた。
今日の夜も比類なき夜としよう。三度目の機会をシュウはじっくりと味わうことに決めた。時間を掛けてマサキを篭絡する。その気持ちに偽りがないからこそ。
耳を舐り続けたシュウに、ああ……、と、堪えきれなくなった声をマサキが洩らす。はっと見開かれた瞳。彼は予想だにしなかった自分の甘ったるい声に驚いたようだ。
咄嗟に動いた手が、濡れた口唇を覆う。
「聞かせてくれないの」
シュウは瞳を潤ませながら必死に声を抑えている彼の耳元に囁きかけた。

僅かに触れる呼気。そういった些細な刺激ですら、身体に堪(こた)えるようだ。丘に上がった魚よろしく、ぴくりぴくりと身体を跳ねさせているマサキにシュウは続けて囁きかけた。

「可愛らしい声が勿体ないですよ、マサキ。こうされたかったのではないの」

小さく頷いたマサキの何と愛くるしく映ることか。

シュウはマサキの手をやんわりと剥いだ。そして、夜着をはだけさせている肉体へと手のひらを這わせていった。

首筋から鎖骨、鎖骨から腋窩(えきか)、腋窩(えきか)から胸部へと滑るように手を動かせば、面白いようにマサキの身体が反応する。あ、あ、あ。小刻みに声を上げたマサキが下げた両手を握り締めた。

これで欲情を煽られない方がどうかしている――……記憶を失ったからこそのマサキの素直さに翻弄され続けていたシュウは、ようやく結実を迎えた自らの想いに感嘆の息を洩らした。恐らく、屈辱に打ち震えながら快感を受け入れてみせた少年が、本来望んでいた行為はこういったものであっただろう。暫く胸部から腰回りを撫で続け

ていたシュウは、ややあっておもむろに彼の乳首に指を這わせた。
　ああっ。腰をしならせて声を上げたマサキに、「いいの？」と問い掛ければ、二度、三度と頷く。「わかったでしょう、マサキ。これで」シュウは言葉を継いだ。「今度はあなたが私を求める番だ」
　だらしなく口を開いて、シュウの愛撫を受け続けるマサキ。腿に前腕、手の甲に指先。触れては乳首へと戻ってくる手に、身体を打ち震わせながら喘ぐマサキ。ついでと耳朶を舐られて嬌声を上げるマサキ。そんなマサキを振り仰がせて口唇を塞いでやれば、一も二もなく吸い付いてくる。
　シュウはその身体をソファへと沈めた。そうして、思うがままにマサキの身体を舐(ねぶ)った。
　そうでなくとも敏感に反応してみせた身体は、更なる高まりに追い詰められていったようだ。我を忘れた態でマサキがシュウの髪を掴んでくる。続けて腰をしならせ、叫び声にも似た声を上げる。
　快感を全身で表現してみせるマサキに、シュウの自制心も限界だ。

彼の夜着を乱雑に剥ぎ取ったシュウは、爪先から髪の先まで。あますところなくマサキの身体を味わってゆく。

眼球を舐め、鼻筋を食み、口唇を塞ぐ。緩み切った表情を取り繕うとも思えぬほどであるらしい。蕩けきった表情でいたマサキは、長く喘がされ続けたからだろう。その口付けが終わると、ぐったりとソファに身体を沈めた。

ぜいぜいと彼の喉から聞こえてくる喘鳴。

これ以上とないぐらいにしどけなく映る、彼の汗に濡れた肢体。白く浮かび上がる素肌がなめかましい。

「満足しましたか、マサキ」

ぼんやりとシュウを見上げているマサキの股間で熱を帯びている男性器。そこに手を這わせながらシュウが問い掛ければ、望んでいたものに手が届いたマサキの欲望に限りはないようだ。躊躇いがちながらも「もっと……」と言葉を返してくる。

「本当に、ずっとこうされることを考えていたのですね」

「そう、だよ……あんたにキスされた時から、ずっと。そればかり考えてて……」

「自分で自分を慰めるほどに？」
刹那、マサキは明らかに狼狽えた。
「な、何で、あんたがそれを知って」
腹芸が出来ないのは、どちらのマサキにせよ同じであるらしい。当て推量で吐いた言葉が図星だったことにシュウは驚きを禁じ得なかったが、元はあのマサキである。遠からず、彼はやり場のない欲望を自分で処理をするようになっていただろう。
「眠れぬ夜の過ごし方ぐらい、私も男ですからね。良く知っているのですよ」
シュウは云って、マサキの足を開かせた。
身体を硬くしたマサキが、不安そうな表情になる。大丈夫ですよと囁きかけて、首筋から胸へ。何度か辿った道筋に舌を滑らせて、臍へと舌先を到達させたシュウは、続けてマサキの男性器に舌を付けた。
あ、と声を上げたマサキの手がシュウの髪を掴む。
見目に違わぬやや小ぶりな男性器。シュウはその男性器を舐った。赤く顔を覗かせている亀頭を吸い、高ぶった陰茎を食む。そして片手で緩く刺激を与えてやりながら、

陰嚢へと。シュウは隅々までマサキの男性器に舌を這わせていった。

そうして、ぶるぶると身体を震わせるだけとなったマサキに、更に顔を下げた。

片手で双丘を割りながらその奥、ひだを寄せている蕾に口を付ける。きゅっと口を萎ませた菊座。彼が感じている緊張感がその筋肉を通じて伝わってくる。

けれどもそれは儚い抵抗だった。

萎んだ菊座の周りが、ぷっくりと膨れている。シュウはその中に舌を差し入れた。存外するりと入った舌に、恐らく日常的に弄っているのだろう。そう見当を付けたシュウは、そのまま彼の蕾を舐(ねぶ)った。

見えないマサキの表情は、けれども口にしている甘ったるい喘ぎ声で知れた。

あ、あっ、んぅ……力が込められた指先の緊張が解けたかと思うと、ほぐれた菊座が口を開く。挿入を待ち望むように収縮を繰り返す菊座に、そろそろ頃合いかとシュウは身体を起こした。

夜着を脱ぐ。そして、これ以上は待てないとばかりに、膝裏に手を差し入れてゆく。

抱え上げた両脚を開かせ、マサキの内部(なか)へ。

素直にシュウの男性器を受け入れたマサキの蕾に、例えようのない快感を覚えながらゆっくりと腰を動かす。深く、浅く突き上げるだに洩れ出る声。ああ、と喘ぐマサキの口唇から、赤く染まった口腔内が覗いている。

シュウは彼の口を塞いだ。息苦しさにところかまわずに爪を立ててくるマサキが、シュウの肌に幾条もの引っ掻き傷を残す。鋭い痛みに目が細まるも、けれどもそれさえも幸福だ。シュウはマサキの身体を掻き抱いて、更に激しく彼を突き上げた。

記憶のあるマサキは、決してこうまで従順にシュウに身体を許しはしないだろう。二度と見られないものを自分は見ているのだ。

シュウは我を忘れてシュウの腕の中でよがり狂うマサキを記憶に留めるように凝視(みつめ)ながら、何度も何度もその身体を突き上げた。

求めていたものを与えられたマサキは面白いように反応した。深く突き上げられては啜り泣くような声を上げ、浅く抉られては鼻にかかるような声を上げる。その、快感に無抵抗な態度の数々が、ただただ可愛らしく感じられて仕方がない。

やがて喘ぎ声の合間に、もう、イク……と、それさえも難儀な様子の言葉が差し挟

まれた。
既に、膨張したマサキの男性器は先端を広く湿らせている有様だった。これでは我慢も限界だろう。シュウは微かに嗤いながら、マサキの脚を二つに折った。そして、「いいですよ、マサキ。好きに達きなさい」深く足を抱え上げて、更に。
――あ、ああ。あ、あ……いく、いく。本当にいく……っ……
目を見開いて喘ぎ続けるマサキの瞳に、瞬間、筆で剥いだように光が漲った。
彼はシュウの腕を強く掴むと、「お、前……！」と、聞き間違いのしようのない声で言葉を放った。「人が意識を取り戻してみれば……何、好き勝手しやがってるんだよ……」紛れもない。シュウは動きを止めて、息荒くもシュウを引き剥がそうと試みているマサキを見下ろした。
マサキは極限状態の中で、その記憶を取り戻したのだ。
思いがけず零れ出る笑み。シュウは嗤い声を上げるのを止められそうになかった。
「あなたが誘ったんですよ、マサキ。それとも、つい先程のことも思い出せないぐらいに、あなたは呆けてしまったのですか」

刹那、記憶を探るように視線を宙に彷徨わせたマサキが、その表情を絶望に歪ませた。この表情だ。シュウは歓喜に身が打ち震わせた。自分が求めていたマサキの見たかった表情は、これだ――。

この期に及んで遠慮をするつもりは、最早ない。欲しいものを取り戻したシュウは、自らの欲望に忠実に、ようやく取り戻したマサキを蹂躙した。

既に存分に高まっていた彼の身体は、その意に反して従順に反応した。「巫山戯ろよ、お前……」自らの身体の感度の良さに、マサキが途惑いを見せる。それでも留まることを知らない抵抗。

この気高さこそが、シュウの欲していたもの。

そして屈しさせたかったもの。

マサキがそう出てくるのであれば、シュウとしては認めさせるまでだ。く……ぅ、あ。程なくして小さく声を上げながらマサキが溜まった精を放つ。それでもシュウはその身体を手放すような真似はしなかった。

果ててては高められ、高められては果てさせられる。繰り返される愛撫に、次第に抵

抗を続けるマサキの力が弱まっていく。
そして迎えた何度目の挿入。ついにマサキの身体から力が抜けた。
抵抗を止めた彼は糸の切れた操り人形のようだった。ただ弄ばれるがままに身体を揺らし、枯らした声で鳴き声を上げる。ややあって、ついに疲労が快感に勝ったのだろう。達したマサキは、ふっと気を失った。

※　※　※

マサキが目を覚ました時、そこはせせこましいソファの上ではなかった。
ひとりで身を休めるのにしては大き過ぎるベッド。恐らくは気を失った後にシュウが運び込んだのだろう。とても自分のものだとは思えないバラバラの記憶を繋ぎ合わせてみるに、どうやらマサキはシュテドニアス軍との戦闘で記憶を失ったところをシュウに保護をされたようだ。
記憶の中の自分が発したらしい言葉に、取った態度の数々。どれも普段の自分であっ

たら決して口にしなかった言葉に、決してしなかったであろう態度ばかりだ。まるで自分の胸の内を暴かれてしまったかのようないたたまれなさに、あの野郎と毒吐きながら、マサキはベッドから這い出た。

一糸纏わぬ姿に服を求めて辺りを見渡せば、ベッドの脇のサイドテーブルに見慣れた服が畳まれて置かれている。一も二もなくそれを手にしたマサキは、服を着替えかけて嫌な予感に眉を潜ませた。着替えも途中なまま、嫌な予感を払拭すべく、部屋の隅にある姿見に自身の身体を映す。

案の定と云うべきか、それが当然だと云うべきか。身体のそこかしこに刻み付けられている紅斑。虫刺されと呼ぶには毒々しい。この誤魔化しようのない痕の所為で、前回のマサキはどれだけ苦労をさせられたか。

またかよ、と呟く。

着替えをするのも風呂に入るのも気を遣う生活はかなり長く続きそうだ。

三度目になってもマサキの生活に対する思い遣りが感じられない男に溜息が洩れるも、云って聞くような性格でもない。腕の一本でも折ってやりゃあ良かった。そう思

いながら着替えを済ませたマサキは、サイバスターを欠いている現状に舌を鳴らした。

顔を合わせたくなくとも、顔を合わせなければ帰れない。。

ベッドルームを出れば、既に起きていたらしいシュウがキッチンに立って朝食の準備をしているところだった。その足元には行動不能状態を脱したらしいマサキの二匹の使い魔が、ちょこんと座ってミルクを飲んでいる。主人に似ず、順応性の高い使い魔だ。呆れながらもマサキはコンロの上に乗っているフライパンと鍋の中身に目を遣った。

スクランブルエッグにソーセージ、スープ。シンクに置かれたボウルの中には、レタスが山と使われているサラダが詰まっている。昨夜、記憶のないマサキが考え事をしている間に剥き過ぎてしまったレタスを、云った通りに使うことにしたようだ。豪快な使い道に眉を顰めながらテーブルに着けば、その卓上にはバケットが積まれたバスケットが置かれている。

独り住まいが習得させたのか。そこそこの手際で料理を進めてゆくシュウに、マサキは「腹が減った」と訴えた。

「記憶が戻るなり尊大ですね、あなたは。私を召使のように使えるのはあなたぐらいですよ」
「好き勝手したのはてめえだろ。このぐらいは好きにさせろよ」
「良く云う」
手伝うべきことなど何もないくらいに、準備の整った食卓。ワンプレートに収められたスクランブルエッグとソーセージにサラダは、野菜の切り方が多少不揃いなぐらいで、他には文句の付けようもない。マサキは目の前に置かれたプレートを頬杖を付きながら眺めた。
――嫌になるほど何でも出来る男だ。
学術に剣術に魔術。この世界で持て囃される能力に長けた男は、恐ろしいことに、マサキを性欲の対象として見ているらしかった。頭を押さえて呻きたくなる思いに囚われながら、最後に残ったスープの準備が整うのを待つ。
「少しは自分から求める気になりましたか」
ようやく温まったようだ。スープを器に盛ったシュウがそれをマサキに差し出しな

がら、朝からするには不釣り合いにも限度がある台詞を吐く。
「ならねえよ。またお前はそうやって……」
「約束したでしょう。あなたと私の秘密だとね」
「これ以上秘密を増やす気は」
「そうでしょうかね」クック、と声を潜ませてシュウが嗤う。「自分の胸に手を当てて考えてみては如何ですか、マサキ。記憶の無いあなたとの生活は、色々と新たな発見をさせてくれたものでしたよ」
屈辱的な現実を突き付けられたマサキは口の端を噛んだ。
一番知られたくない相手に、知られたくなかったことを知られてしまった――そう、記憶のないマサキはあの広いベッドでひとり自慰に耽った。目の前に立つこの忌々しい男との性行為を妄想しながら。それだけではない。その名前を呼びながら達してさえいる。
けれども、それは記憶のないマサキに限った話ではなかったのだ。
それにこの男は気付いているのだろうか。ふと湧き上がった疑念に、そんな筈はな

いと、マサキは反射的に首を振った。
　ここ三日程の記憶を急いで総ざらいする。そこに迂闊に口を滑らしたような記憶はなかった。ならば、大丈夫だ。そう自らに言い聞かせたマサキは、テーブルに付いたシュウに向き合った。
「こうして記憶も戻ったんだ。サイバスターのある場所まで、連れて行ってくれるんだろうな」
「勿論。とはいえ、流石に三日が経過しています。セニアもあなたの探索を始めたようですので、もしかすると、軍に回収されているかも知れません。その時には責任を持ってあなたを王都に送り届けますよ、マサキ」
　バルディア州からラングラン王都までの長い道のりとあっては、公共の交通機関を使う訳にはいかない。何せマサキは極度の方向音痴であるのだ。しかも和平条約調印式が近付いている現状では、一刻も早く王都に戻る必要がある。
　マサキは渋々シュウの提案を受け入れた。
　澄ました表情で自分に顔を向けてくるシュウの厚かましい態度が憎らしい。

髪に、肌に、昨晩の性行為の感触が残っている気がする。

ずっとマサキはこの男から与えられる快感を欲していた。それが思いがけず叶ってしまった夕べ。けれども、それは果たしてこの男自身を求めてのことであるのだろうか？　マサキは迷っていた。否応なしに反応してしまう身体。気付いた時にはこうだったマサキは、自分の性的嗜好が他人とはずれていることに気付いている。

――この欲に餓えた気持ちを、好意のない相手に向けていいものなのか……。

マサキにはわからない。以前のように憎み厭う気持ちはもうなかったが、それが好意かと問われれば答えに詰まる。

好意というものは、もっと穏やかに沁み出すような感情ではないのだろうか。若しくは激しく心を揺さぶる感情であるのではないだろうか。いずれにせよ、愛や恋といった感情は、経験に乏しいマサキにとっては判断を付けるのが難しい。

しかも、それが明瞭（はっきり）したところで、マサキは素直にこの男に身を委ねる訳にはいかないのだ。この男を明確に求めるには、重ねてしまった月日が邪魔をする。敵と味方。その関係が崩れた今となっても、マサキの意識はあの頃のままだ。

だからこそ思う。もしかすると、自分は記憶を失っていた方が幸福だったのではないだろうか。そう、愛玩動物のようにシュウに飼われ続けていられれば……

そんな馬鹿な。マサキは頭を振った。

魔装機の操者である立場を捨ててまでしがみ付いていい関係ではない。そのぐらいの分別は、如何に浅慮なマサキであっても付けられる。そもそも、マサキが持て余しているのは、制御不能なまでに身体を犯す性欲だ。それならば、いっそ割り切って、この男と誰にも云えない関係を続けてゆくのもひとつの手なのかも知れない。

「いやー、一時期はどうなるかと思いましたが、無事に記憶を取り戻せたようで良かったですよ、マサキさん。あのままの生活が続いたら繊細なご主人様の精神が壊れてしまいかねなかったですからね。まさに寸でのところ！　あー、くわばらくわばら。って、そういやご主人様。模型はどうするんです。マサキさんに買って差し上げたあの模型の数々！　まさかご主人様が組み立てる、なんてことありませんよね？」

途中でリビングの窓から飛び込んできた彼の使い魔が饒舌にあれこれ語っている。それをラジオ代わりと聞き流しながら考えに沈んでいれば、いつの間にか話題が自分

のことに及んでいたようだ。「持って帰りますか、マサキ」と、唐突にシュウが尋ねてくる。
「ああ？　何の話だ……って、模型か。お前は確かに模型ってガラじゃねえな」
「あなたの趣味であるのでしたら、挑戦してみてもいい気もしますがね」
「巫山戯ろよ、お前。冗談にならねえこと、云うんじゃねえよ」
それに対してシュウは肩を竦めてみせただけだった。
思った以上にシュウに気を遣わせてしまった三日間の記憶。彼はあんな風に自分を扱いたいのだろうか？　ふと思い出された彼の表情がやけにマサキの胸を締め付ける。穏やかな笑い顔に、懐かしそうな眼差し。記憶のないマサキに向けられたあの表情は、けれども、この自分にこそ向けられたものではなかったか。
「ちょっと！　何て顔をしてるんです、この猫型使い魔！　あたくしを狙っていると思えない！」
「本能が囁きかけてくるんだニャ！」
「捕まえたくて仕方がニャくニャるのよ！」

一羽の使い魔と二匹の使い魔が騒々しい。

悩んでる暇もねえな。食事を終えたマサキは、シュウがテーブルを片付けるのを手伝ってから家を出た。爽やかに吹き抜ける風。うららかな陽気に顔を上げれば、抜けるような青空と見渡す限りの海が広がっている。

――ヌエット海で過ごすなんてこと、二度とねえかも知れないな。

そう考えると、この生活の終わりもどことなく物惜しく感じられる。けれども、跳ねっ返りの強いマサキとしては、そういったささやかな気持ちでさえもシュウには覚られたくはなかった。

行きますよ。と、シュウの声。手にした模型の包みが入った手提げの持ち手を握り締める。

マサキはシュウの導きに従って、その愛機に乗り込んだ。

〈了〉

新版・記憶の底

発行日　2024 年 4 月 7 日

著者　@kyo
https://www.pixiv.net/member.php?id=5201329

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。